観光文化

Tourism & Culture

VOL. 189
2008 May
財団法人日本交通公社

特集◎ 瀬戸内海の風土と文化復興

◆巻頭言
多島海の理想 ― 瀬戸内海と地球　川勝平太……①

◆特集
- 瀬戸内海再発見 ― よみがえる風景　西田正憲……②
- 風景芸術の現場としての琴平山再生計画　田窪恭治……⑥
- 直島に見るアートが呼び覚ます地域の力と風景　秋元雄史……⑪
- 夕日でオンリーワンのまちづくり　若松進一……⑯
- 瀬戸内海を人々の交流の海に　妹尾達樹……⑳

◆連載
Ⅰ あの町この町　第27回
鬼棲む里 ― 岡山県・井原市美星町　池内　紀……㉖
Ⅱ 明治のジャパノロジスト F. ブリンクリーの「美しい国ニッポン」⑥
ジャポニスムの震源で日本画手習い　沢木泰昭……㉜
Ⅲ ホスピタリティの手触り 48
チベット問題と観光　山口由美……㉞

◆新着図書紹介……㊱

東海道・金谷の石畳

東海道の難所の一つに数えられる大井川の渡しを歌川広重は『東海道五十三次之内金谷』に描いているが、その光景は実に穏やかな美しい風景として画面構成している。だが、川を挟んだ島田宿とともに、長雨にたたられると増水で多くの旅人が何日も川留めをくったと伝えられる。駿河国から大井川を越え遠江国へと向かうわけだが、その最初の宿場が金谷である。金谷宿から日坂宿へとたどる道中のおよそ二キロメートルの峠道は、古代から東海道の歌枕「小夜の中山」で知られる険しい山道である。西行法師が〝年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山〟と詠んでいるほどである。私も江戸時代の旅人に思いをはせ老体にムチ打ち山道を歩き出すや、息切れがひどく引き返す羽目になった。金谷坂の石畳は今でこそ見事な山道として復元整備されているが、明治以降、石畳は風雨にさらされ荒廃を余儀なくされてきた。平成に入って四百三十メートルが美しくよみがえったのである。

（写真・文　樋口健二）

多島海の理想―瀬戸内海と地球―

静岡文化芸術大学学長　川勝　平太

瀬戸内海をこよなく愛する人は多い。皇太子徳仁親王殿下も、そのお一人だ。殿下は水運史がご専門で、国際経済史学会や世界水フォーラムなどで成果を発表され、研究者としても著名である。たまたま私は経済史を専門とし、海洋史観を提唱した研究上の縁があって、殿下の研究から多くを学んできた。

殿下は、中世後期の瀬戸内海の津々浦々を結ぶ舟運の研究でデビューされ、オックスフォード大学では、テムズ川上流のオックスフォードを中心にした一八世紀の水運を研究された。その成果は、御著書The Thames as Highway ― a Study of Navigation and Traffic on the Upper Thames in the Eighteenth Century(Oxford, 1989)にまとめられている。「なぜ、テムズなのか」が話題になったとき、御研究のふるさと「美しい多島海(瀬戸内海)」をイメージしながら、「テムズの水は日本に通じています」と応じられた。

「多島海」といえば、我々はおのずと瀬戸内海を思い浮かべる。西洋人ならばエーゲ海だ。しかし、グローバル化で世界の津々浦々が結ばれるようになった現代、「多島海」は、地球を形容するのにふさわしい。人類史上初めて大気圏外に出たガガーリンは、宇宙の漆黒の闇に浮かぶ美しい星を「地球は青かった」という印象にまとめた。地球が青いのは表面積の三分の二が海だからだ。残りの三分の一は大小さまざまな陸地から成る。どの陸地も海に囲まれており、宇宙から見れば、地球は、青い大海に大小さまざまな島々が浮かぶ多島海である。

エーゲ海も、瀬戸内海も、その意味で、地球＝多島海の縮図である。では、どちらが、未来の理想をはらんでいるだろうか。かつて緑の森林に覆われていたエーゲ海の島々は、現在ははげ山だ。古代文明の遺跡とは、文明の墓場の別名である。エーゲ海は過去の文明の海なのだ。一方、瀬戸内海は緑の島々から成る「ガーデンアイランズ」であり、未来の地球文明の理想をはらむ豊饒の海である。

ポスト東京時代に向けて、地域分権が課題である。多島海＝瀬戸内海は、大きな島(ユーラシア)の対岸を流れるテムズのみならず、多島海＝地球に通じている。瀬戸内海を取り囲む九州・中国・四国・近畿は「海の洲」構想を掲げてはいかがか。「海の洲」づくりは、「水(海)の惑星」地球をガーデンアイランズ(美しい多島海)にするモデルになり得る。

(かわかつ　へいた)

瀬戸内海の風土と文化復興

瀬戸内海とは、本州、四国、九州に挟まれた内海。古来から、畿内と九州を結ぶ航路として栄えた。複数の島しょ群で構成された瀬戸内海は、シーボルトをはじめ数多くの欧米人から絶賛された風光明媚な景勝地でもある。今号では、瀬戸内海の風土、文化的な魅力や、再生に向けたさまざまな取り組みを紹介する。

特集 1

瀬戸内海再発見——よみがえる風景

奈良県立大学　地域創造学部教授
西田　正憲

風景文化の瀬戸内海

今からおよそ百年前の一九一一年（明治四十四年）に、瀬戸内海に関する二つの画集が出版される。一つは、二月に出版された『十人写生旅行』であり、もう一つは八月に出版された『瀬戸内海写生一週』である。二つはともに洋画の太平洋画会の画家たちの画集である。中村不折、大下藤次郎、鹿子木孟郎、吉田博、小杉未醒らの三十代から四十代を中心とする十二人の画家たちで、多くは当時活躍していた気鋭の画家たちであり、新聞や雑誌の挿絵なども描いていた。

画集は、須磨や明石の名所絵から離脱し、瀬戸内海の風景画へ大きく飛翔した点で画期的であった。この一群の画家たちは、名所ではない、自分たちの洋画に合う新しい風景を追い求めていた。特に当時、大下藤次郎は尾瀬、上高地、十和田湖などの新たな自然風景を追い求めていたし、やがて、吉田博は日本の山岳のみならず、アルプスやロッキー山脈を追い求めるまでになった。

この画集が出た同じ年の十二月には、小西和の大著『瀬戸内海論』も出版され、その巻頭に、新渡戸稲造が「瀬戸内海は世界の宝石」と賛辞の小文を寄せていた。このころ、瀬戸内海は光り輝いていたのである。

風景は絵画、文学、映像、宗教などさまざまな文化に取り上げられる。文化が風景を発見し描出するとともに、一方で、風景が重要な契機となって文化を創り出す。風景を捉える文化、風景が素材となる文化を風景文化と呼ぶならば、瀬戸内海は風景文

化の宝庫であろう。

戦後の現代になって、瀬戸内海は映画に捉えられていく。映画『裸の島』（新藤兼人脚本・監督）は、冒頭の「耕して天に至る乾いた土　限られた土地」の言葉が示す通り、芸予諸島の裸地化した島の段々畑でひたすら水を運び、離島ゆえに子供を亡くす悲惨な話であったが、穏やかな海を背景に家族が島で助け合い、そして町でつかの間の楽しい一時を過ごす姿には、どこか温かい救いがあった。小豆島の岬の分教場を舞台にした映画『二十四の瞳』（壺井栄原作　木下恵介監督）は教え子が戦争で亡くなっていく話であったが、小豆島の穏やかな風土がかえって戦争の影を浮き彫りにしていた。穏やかさやのどかさは瀬戸内海の真骨頂と言える。

古い港町御手洗の風景

終戦直後の淡路島を舞台にした映画『瀬戸内少年野球団』（阿久悠原作　篠田正浩監督）は、疎開してきた戦争犯罪者の娘、悪事で兄が自殺してしまう弟、片足を切断し帰郷をためらう復員兵、復員兵の弟と不倫を犯してしまうその妻と、みんな重い人生を背負っていたが、グレン・ミラーの音楽と手作りの道具で行う野球が明るい戦後を描いていた。そして何よりも、瀬戸内海の明るい陽光がすべてを包み込み、のどかで古びた風景がすべてをいやしていた。やがて疎開の娘が島を去るが、真っ青な海と空に小島が浮かび、波ひとつない小さな港を錆びた船が離れていく場面は、人間が常に持たなければならない悲しみを深めていた。

瀬戸内海の風景は、内海多島海という庭園のような安らかな自然と、人々の営みがつくり出してきたさまざまな歴史や文化によって織りなされている。それは、あたかも幼年期の原風景であるかのように、我々にほっとするふるさとにも似た親しみを与えてくれる。温和な気候、穏やかな海、静かに浮かぶ島々、白砂青松の浜辺、港の漁船、社寺の祠（ほこら）と境内、山腹の段々畑、軒を接する民家、そして何よりもこれらを貫くのどかな時間、我々が現代社会の中で失ってしまった多くのものを瀬戸内海はまだ残している。

観光のまなざしの変遷

瀬戸内海の風景は近代の欧米人によって絶賛され、その評価が一九世紀を通して世界に広まっていった。特に観光のまなざしは瀬戸内海の風景の普及を推し進めた。一八六八年（慶応三年）の神戸港開港とパシフィック・メール社のサンフランシスコ―上海間の航路開設は瀬戸内海にとって

『瀬戸内海写生一週』に紹介されている画家たち

幸運だった。また、六九年の北米大陸横断鉄道とスエズ運河開通も瀬戸内海に影響を及ぼしていた。世界一周旅行のような観光旅行やルポルタージュを専門とする職業旅行家の往来によって、瀬戸内海の風景は普及していった。万国博覧会の団体旅行やリゾートの海外旅行などを始めた近代旅行業の生みの親トーマス・クックは、七二年に世界一周旅行を売り出し、イギリスから出発しているが、ツアーには彼自身が添乗し、日本にも立ち寄って、瀬戸内海を絶賛していた。

風景を発見するのはまず外部（旅行者）のまなざしであり、その後内部（定住者）のまなざしがその風景に気づく。欧米人のまなざしが瀬戸内海の風景を評価し、その後日本人のまなざしがその風景を評価するようになる。日本人は約千年の間褒めたたえてきた須磨や明石などの歌枕の地をいとも簡単に忘れ去り、新たに内海、多島海、瀬戸、段々畑、港町などの風景を見いだしていった。

二〇世紀の一九〇一年（明治三十四年）、山陽鉄道が兵庫―下関間の全線を開通し、一二年には大阪商船が「瀬戸内海のドル箱航路」と呼ばれた大阪―別府線航路を開業し、瀬戸内海は一大観光地となっていく。ちょうど前述の二つの画集が現れたころである。二七年の東京日日新聞社と大阪毎日新聞社の『日本八景』の選定では、新しい自然景観として、別府、寒霞渓、赤穂御崎、下津井、忠海などを選び、その延長線上に、三四年、備讃瀬戸を中心とする瀬戸内海国立公園が誕生した。

その後、一九五〇年の毎日新聞社の『観光地百選』、五七年の週刊読売の『新日本百景』、六六年の日本交通公社の『新日本旅行地一〇〇選』などでも瀬戸内海は注目され続けた。しかし、高度経済成長期の都市化・工業化による環境破壊、その後の国内団体旅行の衰退などから、瀬戸内海への関心は薄れていく。

一九八七年の読売新聞社の『新日本観光地百選』では、多様化する旅行へのニーズや観光を地域振興の柱とする自治体が浮き彫りとなり、姫路城、厳島、錦帯橋、寒霞渓といった古い観光地に加え、神戸ポートアイランド、倉敷アイビースクエア、瀬戸大橋、平和記念公園といった新しい観光地が現れてくる。九〇年前後には新しいスポットを再生した天保山築港、神戸港メリケンパーク、門司港レトロタウンのウオーターフロントが活気を創り出した。本州四国連絡橋は、八八年の瀬戸大橋、九八年の明石海峡大橋・鳴門海峡大橋、九九年のしまなみ海道と開通し、一時的に注目される。重要伝統的建造物群保存地区をはじめとする歴史的町並み観光が評価され、神戸、倉敷の観光が着実であるように、瀬戸内海は総じて、自然観光が衰退し、都市観光が台頭してきたと言える。観光のまなざしは徐々に瀬戸内海の自然から遠ざかりつつあった。

再評価される瀬戸内海の風景

風景の見方や評価は時代とともに変わる。今、瀬戸内海の自然風景は再び評価され始めている。

自然風景に関して言えば、二〇世紀は、合理的・普遍的でグローバルな価値を志向し、傑出した貴重な自然や原生の自然を重視しすぎた。自然の持つ生態学的価値にとらわれすぎ、自然の持つ歴史的・文化的価値を見逃してきた。二〇世紀の自然風景の評価はひたすら自然性という自然史の尺度に傾斜したが、今、自然が内包する歴史性・文化性に着目した人類史の尺度への揺れ戻しが起きている。二〇世紀には評価されなかった里山・里海の風景、農林漁業の風景、水辺・山辺の風景など普通の風景が光を放ち始めている。人々の営みとともに持続してきた自然風景、人々の歴史や文化を示す自然風景が注目されるようになってきた。自然風景の評価が自然史の風景から人類史の風景へと拡大してきたと言える。

棚田や聖域などの文化的景観、近代の産業遺産、干潟や藻場などの浅海域などを新たに評価する動きも、風景の持つ歴史性・文化性に注目した同根の動きと捉えることができる。瀬戸内海には追い風が吹いている。繊細な自然に融け込む歴史と文化の重層性こそ、瀬戸内海の風景の真髄であり、人々とともに歩み、人々の労苦が刻まれた瀬戸内海の風景は再評価されるに違いない。瀬戸内海の島々は今疲弊しているが、島々の地域文化とそれが紡ぎ出すなりわいの風景は現代人の心を捉えるであろう。

瀬戸内海には、海の文化、石の文化、塩の文化、花の文化、遍路の文化、神社の文化など、自然環境と一体となった環境文化が輝いていた。瀬戸内海には原生の大自然はなかったが、繊細な自然と調和して、里海の漁村、里地の農村、里山の山村などの営みが行われていた。また、各地に近世の港町の面影が強く残っている。今もなお、瀬戸内海は自然と歴史と文化が渾然となった重層的で多様な風景を見せている。

二一世紀の現在、瀬戸内海の島はアート・ツーリズムでにぎわっている。備讃瀬戸の多島海に浮かぶ直島の現代アートはこの瀬戸内海の風景の豊かさにふと気づかせてくれる。現代アートが場所とのかかわりを深め、風土の趣や場所の記憶を強く照らし始めた。風土とは、単なる環境ではなく、歴史性や文化性を内包している。風土は土地の豊かな趣を持っている。二〇世紀は、風土性を切り捨て、場所の記憶と物語をかき消し、壮大な都市文明を築き、至る所を均質化してきた。直島が現代人の心を捉えてやまないのは、直島に何よりも風土と、過去につながる心に染みる風景があるからであり、それを現代アートの力が見事に現前化したからである。現代アートが、土地の持つ潜在力を引き出し、薄い平板な風景から奥行きと深みのある風景へと、風景の再生を成し遂げたのだ。

自然地域における現代アートの台頭もまた、主として表面的な景観に注目した自然史の風景から、より深い土地の意味を探る人類史の風景へという大きな流れと無縁ではない。どこも同じ風景になるというグローバリズムのなかで、地域は風景のローカリズムを追い求め始めた。風土性を色濃く残す瀬戸内海の風景は、百年前とは異なる形で、再び光彩を放つに違いない。瀬戸内海の再発見がなされ、風景がよみがえりつつある。

（にしだ　まさのり）

特集２

風景芸術の現場としての琴平山再生計画

美術家・金刀比羅宮文化顧問
田窪　恭治

東西文明と日本文化

日本人は元来、一木一草にも神が宿る、あるいは、この世の森羅万象のすべてに魂がある、と信じ、山幸・海幸の恩恵をこうむりながら自然の世界に耳を傾けてきました。

その一方で、日本の近代は一八七七年（明治十年）に来日したイギリス人建築家のジョサイア・コンドルが提唱した、鉄骨・コンクリート造りの建築の教えを受けた辰野金吾や片山東熊が、日本で洋風建築の基礎を築きました。

鉄、コンクリート、ガラス等の近代的な素材を駆使した建造物が日本の風土に似合うかどうか、という話は別として第二次世界大戦後の日本の建築家たちは、この三つの素材を武器にインターナショナルスタイルを広め、東京オリンピックや大阪万博といった時代の波に乗り、現代日本の都市文化を築きました。

しかしながら、もっと古い日本では、奈良時代に行基という偉大な僧侶がいて国造りを担いました。

さらに鎌倉時代には、天才的な建築家・重源がいました。彼は建物ばかりではなく、土木工事におけるインフラ整備事業などにもその才能を発揮しました。

室町時代には、夢窓疎石という僧侶が西芳寺庭園など素晴らしい庭を全国各地に残しています。彼らは中国の文化を取り入れながらも独自の努力で、少しずつ和様化してきました。

さらにもっともっと古い時代、日本は朝鮮の文化から大きな影響を受けています。弥生時代から古墳時代に作られた埴輪などに、その跡がうかがえますが、特に家型埴輪の中には日本の神社をほうふつさせるものがあります。と同時に、今に残る朝鮮半島の町並みの写真を見ると、どこか懐かしい思いがするのは私だけでしょうか。瀬戸内海に面した古い港町とどこかで通底しているような気がします。

デザイン・サーベイ

建築史家の伊藤ていじとカメラマンの二川幸夫が、一九五〇年代後半から二十五年もの長い時間をかけて日本全国を取材してまとめた『日本の民家』という写真集の中には、古き良き日本人の生活ぶりを示す集落や建物の姿が焼き付けられています。

かつて私たち日本人は日常の生活を通して自然の世界を感受する心を養ってきました。この写真集からは、そうした少し前に生きて

いた日本人の顔が見えてくるようです。

長い歴史の中から生まれた一つひとつの要素が結びついて日本独自の詩歌や俳句、絵画、行儀作法や茶道、武道の形式、あるいは人や自然に対する道徳観や美学が出来上がってきました。

しかし第二次世界大戦後の日本は、欧米の効率主義のあおりを受けて、このような古き良き日本の風景はおろか、明治、大正、昭和の貴重な建物さえも消し去ろうとしています。

そんな折、日本政府は一九七五年（昭和五十年）に文化財保護法を改正して『伝統的建造物群保存地区』という制度を作りました。この制度により、それまで日本の各地に残されてきた城下町や宿場町、門前町などの歴史的集落や町並みの保存が図られるようになりました。

このような法制化に先立つ一九六〇年代末から、建築家の宮脇檀と法政大学の学生たちが実施した「デザイン・サーベイ」という試みは大変意味のある仕事でした。

その中の一人、建築家の中山繁信はデザイン・サーベイの概念を「現地体験による調査研究の手法」と位置づけていますが、調査は一九六六年（昭和四十一年）の「倉敷」に始まり、「馬籠」「萩」「五箇荘」「琴平」「稗田」「室津」「篠山」「平福」と七年間作業を続け、素晴らしい図面や貴重な資料を残しています。

「現在」は「過去」の連なりの中で出現しますが「未来」は「現在」の先にあるとは限りません。むしろ「過去」の世界に未来のヒントがあるように思えます。その意味において伊藤ていじや二川幸夫、宮脇檀たちの仕事はとても重要なものでした。

一九六〇年代末から七〇年にかけて、世界は「未来に向かって進む」ことよりも「過去を振り返る」ことのほうが大切だ、ということに気づき始めたのです。

私は一九七〇年代の初めから八〇年代末にかけて「現代美術」というジャンルで作家活動をしていましたが、そのころすでに、美術表現を通じて他者に啓蒙を促す意味でのイズム（主義）やエコール（派）による活動は終わりを告げ、作品を売買するためのアート・マーケットが中心となった美術の制度が出来上がっていました。

「風景芸術」

そこで私はいわゆる美術業界から抜け出し、見て触って感じることのできる具体的な風景を私の表現の対象とすることにしました。その最初の試みが、建築家の鈴木了二や写真家の安斎重男と行った『絶対現場―一九八七』でした。

その内容は、当時土地開発で壊される運命にあった東京・青山の民家二棟の壁やドアなどを外し、畳や床をはがし、はりと柱だけの姿にして床だった所に強化ガラスを敷きつめ、その上を歩きながら観賞してもらう、というものでした。

その後私はフランスに移住し、一九八九年から十年の歳月をかけて、ノルマンディー地方にあった古い小さな礼拝堂を現代によみがえらせるプロジェクトを実施しました。

『絶対現場』では「家」の持つ建築的要素をはぎ取っていくことによって時代をさかのぼり、現場の記憶や昔のイメージを露出することに専念しましたが、「サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト」と名付けられたフランスでの仕事もまた、すでにある古い礼拝堂を表現の素材として使用し、いったん分解した後、今度は私自身の感覚で新しく組み立て直しながらつくり上げる、というものでした。

古い建物を丁寧に分解していくことで礼拝堂が建てられた時代にさかのぼり、元のイメージを守りながらも、さらに現代的なニュアンスを持った作品として現在によみがえらせる。そんな気持ちで実施したプロジェクトでした。

この礼拝堂は私が内部にノルマンディーの林檎の絵を描いたことで、今では『林檎の礼拝堂』と呼ばれています。

林檎の花や実が毎年違う所に花や実をつけるように、それでいて昨年と変わらぬ林檎のイメージを与えてくれるように、この仕事の目的は今までと何も変わらない風景をつくることでした。

私は礼拝堂の仕事を通じて、自分より長い時間を生きるであろうモノやコトの総体である特定の現場の風景を対象とした仕事を「風景美術」と呼び、作家がいなくなった未来においても生き続ける表現の現場を「風景芸術」と呼ぶことにしました。

私の風景芸術への取り組みは伊藤ていじや二川幸夫、宮脇檀といった大先輩たちが日本の風景を舞台にダイナミックに記録してきたフィールド・ワークと少し違った表現方法かもしれませんが、どこかでしっかりと通底しているように思えます。

その意味では、私が現在進めている『琴平山再生計画』を進める上で彼らの残してくれた仕事が大変参考になっています。

私が生まれ育った瀬戸内海沿岸の地域にはまだまだ美しい風景が残されています。

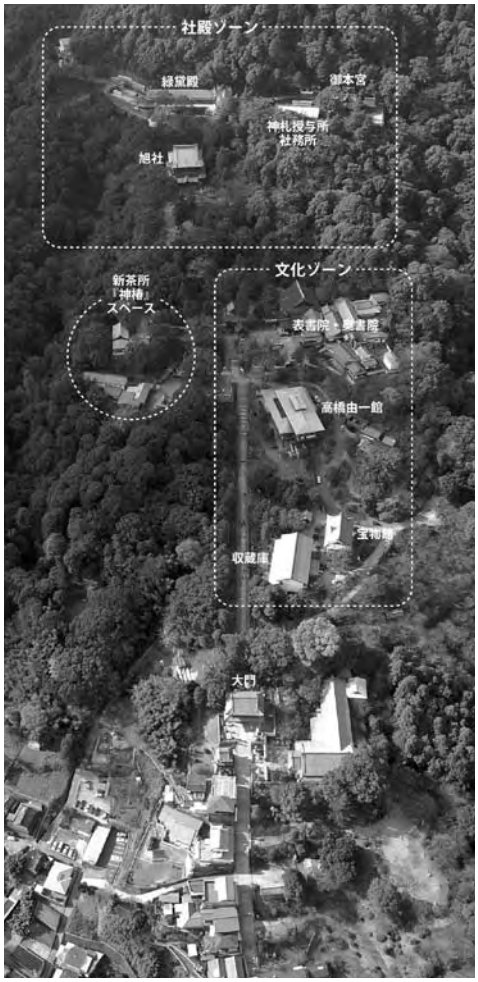
『琴平山再生計画』

礼拝堂の仕事を終えた私は二〇〇〇年から四国の「こんぴらさん」として有名な金刀比羅宮の琴陵宮司とともに『琴平山再生計画』を進めています。

この仕事は私の高校時代の同級生だった琴陵宮司から「信仰と文化を二本柱とした金刀比羅宮のさらなる活性化を推進してほしい」という依頼を受けて始まった、金刀比羅宮の境内全体を対象とした風景芸術です。

金刀比羅宮のある琴平山は、一九四九年（昭和二十四年）に名勝並びに天然記念物に指定され、翌五〇年には模範的な自然林として全山国立公園に指定された日本を代表する鎮守の森で、小さな国のような所です。

初めに琴陵宮司からは「毎日がお正月のようにしてほしい」と言われていたのですが、金刀比羅宮の境内地は三十万坪ともいわれ、広大な空間に宗教施設や文化施設、



2004 年「第 1 次・琴平山再生計画」工事途中の様子

さらには石段や道路、庭園などが入り交じり、どこから手を着けてよいのか分からないほど広い所でした。そこで私は最初にスタッフとともに境内を実測し、正確な図面に基づいた模型を制作しながらフィールド調査を重ねるなかから計画を練っていきました。その結果、広い境内を四つのゾーンに分け、それぞれ五年ほどの時間をかけながら順次整備していくプランが出来上がりました。

文化ゾーン周辺の風景

まず御本宮を中心とした、石段の数にして七百八十五段目から六百段目辺りの宗教施設が広がる部分を「社殿ゾーン」とし、表書院や奥書院、宝物館などの文化施設が立ち並ぶ四百段目辺りを「文化ゾーン」と名付けてエリア分けをし、整備することにしました。

金刀比羅宮では三十三年に一度の遷座祭『平成の大遷座祭』が二〇〇四年の秋に斎行されることになっていましたので、それまでに「社殿ゾーン」と「文化ゾーン」の整備を完成させることを目標にそれぞれの計画をスタートさせました。

その仕事の内容は次のようになります。

社殿ゾーン

① 御本宮の檜皮屋根のふき替えを中心に、調度品などを一新する遷座祭に関する仕事
② 御本宮の格天井に復元される「桜樹木地蒔絵」の制作
③ 神札授与所と新社務所、参集殿と斎館の新築工事

文化ゾーン

① 各文化施設の改修工事
② 文化財の調査と作品図録の制作
③ 文化財の修復作業
④ 企画展や交流展、常設展の実施
⑤ 金刀比羅宮のイメージ計画（全国への発信）

などがその主な仕事で、これらの作業を完成させることが総合プロデューサーである私の役目でした。

二〇〇四年九月、金刀比羅宮の『平成の大遷座祭』は大成功のうちに終わり、「社殿ゾーン」と「文化ゾーン」の整備を目的とした『第一次・琴平山再生計画』も、そのほとんどすべての仕事を終えることができました。

現代の表書院『神椿』の誕生

そして二〇〇七年の秋、『第一次・琴平山再生計画』の最後の仕事である新茶所『神椿』が完成しました。

江戸の昔から石段にして五百段目の場所にあった茶所は、現在まで数え切れないほど多くの参拝者たちの疲れをいやしてきました。しかし、これまでの茶所は南側の谷を背にして立ちはだかり、せっかくこれまで生き残ってきた素晴らしい原生林が見渡せる場所をふさいでいたのです。

私は以前からひそかに、この建物をなく

『神椿』屋上石畳

有田焼壁画

し、谷側の風景を見渡せるようにしたいと考えていました。

金刀比羅宮のふもとに住むようになって五年、私は新しい茶所と南側の谷の景観デザインを考えていた日々のなかで、ある時ふと、この南側の谷に自生するヤブツバキの素朴で可憐な姿に、こんぴらさんの神様に通じる素直で自然な性格を感じ取りました。

それから先は長いようで短い時間があっという間に過ぎ、建築のデザインが決まり、約三年間の時間を費やして新しい茶所が竣工しました。

昔の茶所は曳屋という方法で、建物を解体することなく、谷の西のほうの少し低い位置に移動しました。新しい茶所は今までのグランドラインから下に二層掘り下げて、谷間に向けて開放した造りなので、金刀比羅宮の昔ながらの石段のある風景を邪魔することはありません。

新しい茶所は琴陵宮司によって『神椿』と名付けられました。

建物と内部に描かれた椿の壁画に神が宿った瞬間です。

一階がカフェで地下一階がレストラン。運営は東京銀座の資生堂パーラーが担当し、参拝を済ませた人々の喉を潤し空腹を満たしてくれる、現代の表書院とも言える場所になりました。

この『神椿』の誕生で少しずつ「毎日がお正月」のようになり始めた金刀比羅宮ですが、新しい建物は二枚の床と屋上の石の床が南側の谷に向かって飛び出していて、金刀比羅宮の原始林に包まれた、とても安らげる場所になりました。

北側の壁には吹き抜けの空間を貫いた、こんぴらさんのヤブツバキの絵がブルー一色で描かれ、有田焼のクールな白磁の中で揺れています。

何も変わらない風景とは、何もしないで〝冷凍保存〟することではありません。何げなく通り過ぎる人々に気づかれないように、そしてある時ふと気がつくとすべてが変わっているような、それでいて昨日と何も変わらないような、そんな世界なのです。

（たくぼ　きょうじ）

特集３

直島に見るアートが呼び覚ます地域の力と風景

金沢21世紀美術館館長
前・地中美術館館長
秋元　雄史

「アートアイランド」と呼ばれる島

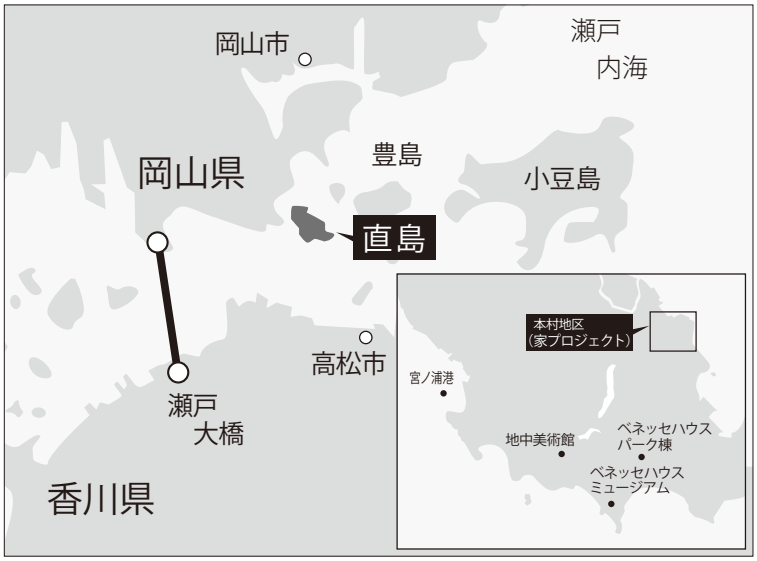
瀬戸内海の東に位置する直島は、周囲十六キロの中規模な島である。現在は島民数三千五百人ほどで、最大人口を誇った一九五〇年代からすると半数にも満たないが、それでも近年活気を取り戻しつつある。

その理由は、現代美術による島おこしがうまく軌道に乗ってきたからで、二〇〇七年の島外からの訪問者数は年間二十三万人。三千五百人の島にこれほどの数の来島者がある。このようにうなぎ登りに観光客が増えたのは二〇〇〇年以降のことで、今では、夏場のシーズンには細い道は車でごった返し、渋滞が起きるほどになった。

訪問者の多くは都市部を生活圏とする人たちで、大阪、京都などの関西圏、東京などの関東圏からが多い。それに加えて、必ずと言っていいほど毎日、欧米人を含めた海外からの観光客を見かける。聞くところによると、欧米系のガイドブックには、日本の新しい文化スポットとして紹介されているらしい。

島に渡り、現代アートと島の暮らしを楽しみ、そして高級ホテルに宿泊し、料理を堪能する。少なくても一泊二日、長い人では数泊の予定を立てる。このような一連の直島滞在のあり方をどのように言い表せばいいだろうか。

例えば「アートリゾート」という言い方か、もしくは「アイランドリゾート」か。しかし実際は、この言葉に含まれるちょっと気軽な行楽気分とは少し異なった部分



直島周辺マップ

で直島は評価されてきた。大した宣伝もしないのに、口コミで訪問者は訪れ、ファンとなり、リピーターになっていくが、そうした訪問者が直島を何と呼んでいるかというと、「アートアイランド＝美の聖地」である。直島の宿泊体験は贅沢なものであるが、それでも単なる行楽気分と違った文化の奥行きがある。

直島のアートによる開発

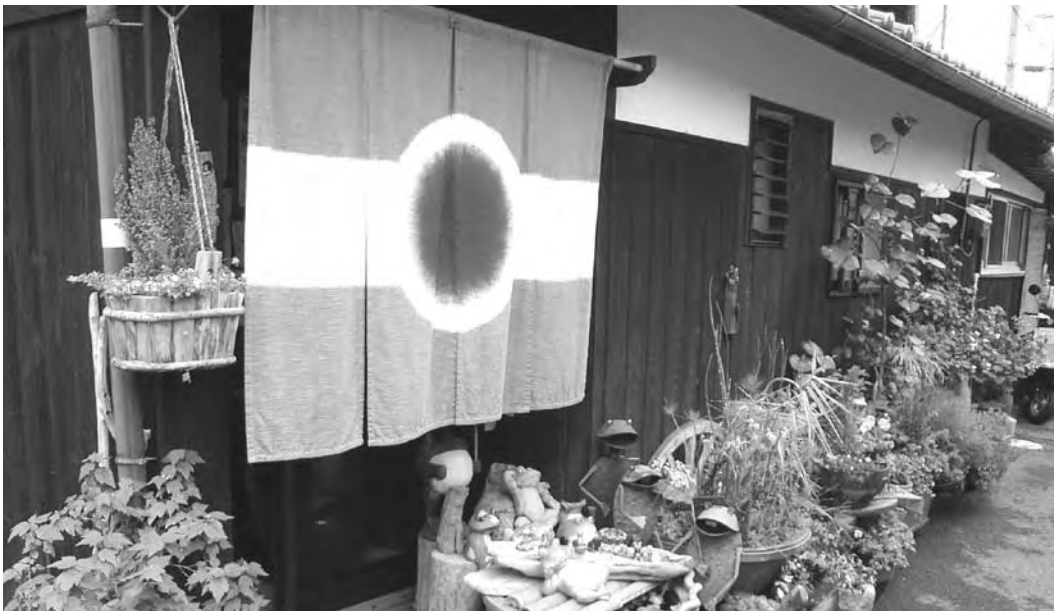
かつて八〇年代から九〇年代にかけて、日本中はリゾート開発に沸いた。教育出版最大手のベネッセコーポレーションが直島を所有したのも八〇年代である。どんな辺ぴな所でも大手の観光開発業者によって土地は押さえられて、ゴルフ場、スキー場、遊園地、テーマパークと次々に造られては消えていった。少なくとも直島は途中で終焉することなく今に続いてきた。なぜ直島は残ったのか。

その要因は、複合的で簡単に解き明かすことはできないが、一つ言えることは芸術に対する強いポリシーとそれを実現した作品のクオリティーの高さだろう。

最近、直島を知った人の中には、直島はここ数年の間にできた施設だと思っている人もいる。実際は、当初の計画段階まで含めれば、二十数年をかけてきた。初めの十年ほどはほとんど知られることもなく、来島者数三万人台が続き、経営的にも厳しかった。だから今の姿は忍耐のたまものであり、トップからスタッフ一人ひとりまでが知恵を絞り出し、工夫を凝らした結果である。

キャンプ場からホテル、そして美術館へ

ベネッセコーポレーションが直島で初めに着手した事業はキャンプ場であった。通信教育を受講する子供向けのキャンプ場として一九八九年にオープン。教育出版事業と連動して夏のキャンププログラムは作られたが、後に教育事業の拡大につれて、手作りの小規模対応のキャンプ場



本村地区の民家の多くに色とりどりののれんが掛かる

では追いつかなくなり休止した。その後にオープンしたのが九二年完成のベネッセハウス・ミュージアム（旧ベネッセハウス・直島コンテンポラリーアートミュージアム）である。ベネッセコーポレーションが事実上の美術へのかかわりを表明したのがこの施設である。

ベネッセハウス・ミュージアムは、地上部には客室十室を備え、地下部分にはギャラリーを備えたホテルと美術館の複合施設である。ギャラリーには、それまでに収集してきたアメリカ現代美術の作品を展示した。

開館当初はそれほど人気もなく、予約の電話もまばらで週末の入館者も少なかった。オープン時の来場者数は年間一万人ほどで、私はこの前年にベネッセコーポレーションに中途入社し美術の担当となっていた。

ベネッセハウス・ミュージアムの設計は、世界的に有名な安藤忠雄氏で話題にもなったが、それにもかかわらず来場者数は思うように伸びず、集客の難しさを感じた。

瀬戸内の風景と島の特徴を生かす

通常、都市部の美術館は特別展を企画し、その目新しさによって集客する。一九九二年から二年ほどは特別展を開催した。デザイナーの三宅一生展、草月流の家元の勅使河原宏展、それに現代美術のアーティストを紹介する展覧会などである。実施すれば少し来場者数は伸びる、でも決定的な状況が作れない、そんな足踏み状態が続いた。このころになると私に企画を任される機会が生まれてきた。

一つ目の転機が訪れたのが一九九四年、九五年で、直島から見える海の景色と現代美術を組み合わせた企画で積極的に瀬戸内の美しさを取り入れた展覧会だ。それまでは美術館の中だけでの展示だったので、屋外に出て積極的に瀬戸内の風景と美術を関係づけた。

九五年には安藤忠雄氏の設計でホテルの別館が建設され、施設規模が拡大した。また、ヴェネツィアビエンナーレとい

ベネッセハウスパーク棟からの眺望

宮ノ浦港の様子

う国際展で展覧会を催すなど国際的な場でアピールしていった。このことが後々生きてくる。

この時期になると美術を軸に直島開発をしていく路線がはっきりして、コンテンツとして美術があり、ホテルやキャンプ場は宿泊を担うハードという位置づけになっていった。このころの来島者数はまだ三万人台である。

島への思いが状況を変える

一九九八年から二〇〇〇年は二つ目の転機が訪れた時期である。

これ以前から直島は人口の減少と高齢化に悩まされていた。空き家・廃屋が目立ち始め、集落が活気を失っていた。美術館とホテルのある南側だけが元気でもしょうがない。人が生活する島の中心部に活気がなければ、やがて島全体が活気を失う。

そこで始めたのが「家プロジェクト」と呼ばれる廃屋再生の美術活動である。これは、純粋な地域への文化貢献事業として始まった。だからビジネス的な発想はない。ただ町を美しく再生したいという思いからである。

数年たつうちに次第に件数も増えて三件ほどになった。このころからにわかに国内外の美術関係者が直島を評価し始め、また、島の人々とも心が通うようになった。

面白いもので、何かの拍子でいい方向に動き始めると、これまで突破できなかった壁がいとも簡単に越えられるようになる。町中での美術の展開は思わぬ評価を得ることになる。

二〇〇〇年には、島全体を展覧会場とした「直島スタンダード」展を開催した。廃屋、空き家、商店、道や広場など、島のあちらこちらを活用したもので、直島

の日常生活を美術作品と一緒に垣間見ることができると好評を博した。この時期になると観光客が五万人ほどになった。

島とかかわり、島民とともに作り上げる

二〇〇四年に開館した「地中美術館」は、当初開発の始まった島の南側に建っている。現代アーティスト二人と近代美術の巨匠モネ、建築家の安藤忠雄氏の作品が恒久設置される特殊な美術館である。非常に個性が強いので、入館者数は多くて年間数万人だろうと思っていた。ただ、年々観光客数は増加して好調だったので七万人の計画を立てた。これはかなり強気な数字だが、ふたを開けてみると初年度から七万人を達成し、二〇〇七年度には十三万人にもなった。

私が直島を退く二〇〇六年に最後の仕事として行ったのが、「家プロジェクト」三件の完成と「直島スタンダード2」展の開催である。私はどうしても町中での展開に一区切りをつけたかった。なぜなら、直島はもう一押しすればブレークするところまできていたからである。すでに明確なキャラクターの一端は露出している。あとはもう一押し、コンセプトをより明確にするための整備を行えばいい。

そのために考えたのは「家プロジェクト」を七件にして一定の規模を持たせ、本村という集落を南側に匹敵する美術エリアにすることである。自然の中に美術館の集積する南側エリアと、伝統的な集落と調和する本村エリアの二つができれば直島のイメージはより広がる。

もう一つ気がかりだったのが、直島の玄関口の宮ノ浦港をアートの島にふさわしい場所にすることであるが、ちょうどタイミングよく直島町が日本人の建築家ユニット「SANAA（妹島和世・西沢立衛）」の独創的な設計で建築に着手したので、それに合わせて「直島スタンダード2」を開催し、話題性のある玄関口が完成した。

この三つのエリアが特徴づけられたことによって今の直島の姿が出来上がった。

島の未来へ向かって

私は残念ながら二〇〇六年までの直島しか知らないが、その後も数々の活動が起こっているようである。棚田での米作りと里山の景観保存、それに新しい美術館構想がいくつかあるようだし、他の島でも美術と建築によって島おこしを行っていくプランがあるようだ。直島から始まった美術による島おこしは、瀬戸内海に広がりそうである。

初めビジネス色の強かった直島での活動は、やがて文化による島づくりへと移行した。この動きが軌道に乗って文化的な集積が起こった。それが功を奏して、より多くの人たちがかかわることができ、島を活性化することができた。

ある一定の文化度を持つと、今度はそこに集まった人向けに商売が生まれる。直島には、観光客相手の食堂、喫茶店、民宿なども増えた。これまでサービス業とは無縁だった島が、役場では観光が重要な施策となりサービス業によって成長している。

私がかかわり始めた九一年当初、一万人から始まった直島は、現在その二十三倍の二十三万人の観光客を受け入れる島になった。直島の仕事にかかわれたことをとても幸運に思うし、トップの福武さん初め、継続して仕事に従事しているメンバーを誇りに思っている。私にとって直島は、志を抱せてくれた場所である。

（あきもと　ゆうじ）

特集４

夕日でオンリーワンのまちづくり

人間牧場　主宰
若松　進一

自分のふるさとが語れない

「あなたはどちらから来られましたか?」。私がまだ若かったころ、東京の日本青年館で開かれた青年問題研究集会の席上、唐突に尋ねられた。「はい私は愛媛県から来ました」と言えば「愛知県」と間違えられ、「松山の近くです」と言えば「埼玉県東松山市」と間違えられ、「道後温泉より西へ二十五キロ行った瀬戸内海に面した町」といくら枕詞を並べ立てて説明しても、揚げ句の果ては、「あなたの町は電気がついているか」と馬鹿にされた悔しい思い出が今も脳裏に強く焼きついている。

その時はそんな何もない町に生まれたことを悔やんだものだが、「何もないなら何でもできる」と開き直って勝手に思い込み、どこにでもある「夕日」を地域資源にして苦節二十年、どうにか夕日で飯が食えるようになったのだから不思議な話である。

夕日との出会い

「夕日」との出会いは偶然始まった。当時私は町の教育委員会で社会教育の仕事をしていた。私の行った「金儲けの公民館活動」や「夫婦学級」は、集落の戸数の倍の人数が集まる成果を収め、社会教育の現場ではかなり有名になっていて、ＮＨＫがこの様子を「明るい農村」という番組で紹介するというのである。この番組取材のディレクターは、道路事情の悪い当時のことゆえ、列車に乗って東京からやって来ることになっていた。そのディレクターは「いよ上灘駅」に降りなければならないのに、間違って次の「下灘駅」まで乗り過ごしてしまったのである。間違いに気づいたディレクターは役場に電話をかけ「下灘駅」まで迎えに来るよう頼み、「いよ上灘駅」に迎えに行っていた私に伝えられ、私は公用車を走らせて「下灘駅」へ向かった。迎えに来た私に彼は「間違ってラッキーでした。こんなに美しい夕日が見えるとは感動しました」と、今まさに水平線に沈まんとするダルマの夕日を指さすのである。その時私の心の奥底に潜む夕日の思い出が記憶の中から三つ浮かび上がってきた。一つは子供のころから下灘という漁村に生まれ育って今日まで見てきた夕日、二つ目は十八歳の時、愛媛県立宇和島水産高校の練習船「愛媛丸」で遠洋航海に行った折、南太平洋の珊瑚海で見た夕日、三つ目は総理府派遣「第十回青年の船」の班長として、アメリカ・メキシコ・ハワイを歴訪した時に見た夕日であった。それらがリンクして浮かび上がって顕在化し、

「夕日は美しい。夕日なら地域資源になるかもしれない」と淡い期待を持つようになったのである。

夕日によるまちづくり

しかし、沈む・落ちる・没するなどの形容詞で表現するように、昇る朝日に比べて夕日はマイナスイメージが強く、ほとんどの人が「夕日では町は興せない」と、百人中九十九人までが反対するありさまだった。早速全国の実態をこの目で確かめてみたが、「夕日が美しい」といいながら何も手を着けていないことに着目し、「夕焼けコンサート」を思いついた。しかし金もなく誰を呼ぶかさえも分らない手探りの状態では、なかなか前へは進めなかった。とりあえず青年たちと一緒になって町長の所へ予算を出してもらうよう頼みに行ったが、町長は

夕焼けコンサート

「夕日は沈む。沈むような町をつくってどうするのか。やめとけ」と私たちを一蹴した。私は町長が反対したため、余計力が沸いてきて、「ようし、やってやろうじゃないか」と、一口一万円の寄付を五十口募り五十万円を集めた。さて誰を呼ぶか。漁村ゆえに北島三郎や鳥羽一郎をと言う若者を尻目に「ベートーベン」をやると言い張り、日フィルのトロンボーン奏者に当たりをつけて承諾させ、フーテンの寅さんのやって来た、日本で一番海に近い下灘駅のプラットホームを使う奇抜なアイデア企画がスタートした。

早速ＪＲにこの企画を持ちかけたところ、「前例がないので」と案の定強い反対に遭ったが、「ＪＲ（旧国鉄）は国＋金＋失う＝赤字」などと批判をして、渋々了解させた。またＮＨＫに番組を作ってほしいと懇願し、番組まで制作してもらうほどの熱の入れ方だった。

やがて夢は具現化したが、案内しても「私は反対しているから行かない」と渋る町長を「町の将来が危ない」と説得し、「いよ上灘駅」から列車に乗せて会場の「下灘駅」に降ろしファンファーレを鳴らしてスポットを当て、町長の挨拶でスタートさせるよう仕組んだのである。町長は予期せぬ千人もの人で埋まるステージで「皆さん私も常々思っていました。双海の夕日は日本一です」と挨拶してしまったのだ。

間違いから始まった無人駅での夕焼けコンサートは、以来二十三年を経た今も若者たちの手によって大切に受け継がれているが、あれほど反対したＪＲは今や「夕焼けトロッコ列車」を走らせて販促をかけているのだから面白い。

やがて名もなきわが双海町は、「夕焼けコンサート」の回を重ねるごとに「夕日のきれいな町」であることが県内から県外へと広がり始めた。これ幸いと夕日にこだわったまちづくりを強力に推進した。海岸国道３７８号を公募三千八百件の中から「夕やけこやけライン」と命名したり、町のキャッチフレーズも二千六百六十一件の中から「しずむ夕日が立ちどまる町」と決まり、いよいよ機運は高まった。折しも国道のバイパス工事が始まり、千載一遇のチャンスと捉えて海岸沿いを埋め立て、海の交流拠点「シーサイド公園」計画を発表した。山の交流拠点「潮風ふれあい公園」と合わせると、町の年間予算に匹敵するわが町としては有

史以来の大型プロジェクト事業となって、反対意見が相次いだ。議会で「もしこの公園に人が来ず赤字になったらどうするのか」と質問され、「赤字になったら黒いボールペンで書きます」と答弁した私にその議員は激怒し、「もし赤字になったらクビだ」とくぎを刺した。あれから二十年、そのシーサイド公園は夕日のメッカとして愛媛県内屈指の観光地となり、道の駅に登録されたこともあって今では年間五十五万人の観光客を集め、運営のために作った第三セクター「有限会社シーサイドふたみ」は設立開業以来十三年間一度も赤字になることなく黒字経営を継続し、出資産業七団体に対し毎年五％の配当をするなど優良企業として、指定管理者になった今も順調な発展を遂げている。

新しい発想

私は町民から別名「夕やけ課長」と呼ばれるほど夕日に思いを込めて生きてきた人間である。課長以外まったく部下のいない日本一小さな課の課長として、しかし一人ゆえ日本一まとまりの良い課の課長としてさまざまなアイデアを実践に移して生きてきた。「魚は臭い、ミカンは重い」という若者たちに、漁協女性部のおばちゃんたちと魚のすり身でじゃこ天という天ぷらを作り売り出した。最初はなかなか売れなかったじゃこ天も若者向きに串に刺して歩きながら食べるストーリーを考え出して行列のできる店となり、ちくわも望遠鏡というアイデアでヒット商品にしたり、夕やけソフトクリームも、ユーヒーヒーコーヒーなどとパロディ豊かな商品に仕上げて話題を集めた。また冬場になるとどこの観光地も閑古鳥が鳴く悪しき弊害をなくすため、海岸国道と平行して走るＪＲ予讃線海岸回りの線路沿いに菜の花の種をまくことを考えＪＲに許可を求めたが、残念ながらモグラが入って列車が転覆するとの理由から首を縦には振らなかった。それなら野生の自然に生えさそうと、エプロンにポケットを粗く縫い、ライオンズクラブからもらった種をポケットから落としていった。ちなみにこの作戦では、エプロン会議のおばちゃんが野焼きのためにつけた火が、折からの突風にあおられて消防車まで出動するボヤ騒ぎとなり、列車まで止めて鉄道公安室の取調べを受けたこともあった。その花も次第に拡大し、今では伊予路に春を呼ぶ風物として、冬枯れの二月から三月まで五万人もの人で賑わいを見せ、反対したＪＲは菜の花トロッコ列車を走らせ、菜の花ウォークを行っている。

これまで

しかし、過ぎてしまえばいかにも順風満帆のように聞こえるが、夕日による観光地づくりは反対や失敗の連続で、決して平坦な道ではなかった。地域資源を七つの漢字で表すなら、優（優秀なもの）・少（希少価値のあるもの）・凡（平凡なもの）・負（マイナスイメージなもの）・棄（廃棄されるようなもの）・未（未利用なもの）・美（美しいもの）で表現できるが、夕日はそのほとんどを満たしている地域資源であるが故に、誰も見向きもしなかったようだ。

私はシーサイド公園の人工砂浜を毎日朝五時から八時までの三時間、毎日欠かさず十二年間も掃除をし続けた。そのことが結果的には「真似しない真似できないアイデアで地域力を作り上げるカリスマ」として国土交通省の観光カリスマ百選に選定された通り、夕日にこだわり夕日の物語をたくさん作った。それはナンバーワンやベスト

ワンを目指す今までの観光地づくりとは違うオンリーワンをつくる運動であった。

自分の町を語れなかった子供たちが、伊予市に合併して双海町という自治体は地図上から消えたけど「私のふるさとは夕日の美しい花のいっぱい咲く双海町」、と胸を張って言ってくれることが何よりもうれしいまちづくりの成果である。

これから

教育長を最後に三十五年間の公職から退き、一自由人となった私は長年の夢であった人間牧場を作った。「六十代を楽しく生きようと思えば五十代をどう生きたかが問われる」と思い、五十代で人間牧場の構想を練り続けていたのである。標高一三〇メートルの瀬戸内海を一望できる小高いかつてのミカン畑に、水平線の家やロケーション五右衛門風呂、木の上のツリーハウス、農場などの研修施設を整備し、そこを拠点に再びオンリーワンに挑戦し続けている。すでに少年少女おもしろ教室やフロンティア塾なども開講し、子供たちや地域の人と再び新しい風を起こしているが、世にいう団塊の世代の人たちにとっても憧れの施設らしく、たくさんの人たちが集まって、楽しい、新しい、美しいをキーワードに活動を展開している。

人間牧場・水平線の家

私は今、地元の愛媛大学法文学部非常勤講師として「地域振興とまちづくり」の講義をする傍ら全国で講演活動を続けている。何もなかった町を夕日をテーマにオンリーワンで活性化に導いた体験を踏まえ、夢と熱意、それにアイデアと行動力さえあれば「夢はドリームではなくターゲットである」と誰にでもできることを訴え続けている。

また、百五十年もの年輪を刻んだ高知県馬路村産魚梁瀬杉の原木切り株を手に入れたのをきっかけに、この切り株にあやかって百五十の話のネタを創作し、高座本『夕日徒然草』として出版、話芸とセットにした落語ならぬ落伍だが、夕日亭大根心という芸名でまちづくり寄席ライブを切り株の上で熱演している。

さらに、「shin-」さんの日記」というブログを立ち上げ、ほとんど毎日、朝夕二本の記事を「人間牧場」というタイトルで書き綴って情報発信に余念がない。

人間はただ漫然と日々を過ごしていては、時代の流れが速い現代では下りのエスカレーターに乗って上へ進がごとく、むしろ退化することだってあり得る。夢と希望を持って行動すれば必ず進化するものである。

私の信念は、ポール・J・マイヤーの言葉のように「鮮やかに想像し、熱烈に望み、心から信じ、魂を込めた熱意を持って行動すれば、何事もついには実現する」ことである。自分を見失わないことがオンリーワンへの道である。

（わかまつ　しんいち）

特集５

瀬戸内海を人々の交流の海に

瀬戸内アンカレッジネットワーク　会長
妹尾　達樹

瀬戸内海の魅力

早春三月、瀬戸内の東部海域、大阪湾・播磨灘では、イカナゴ漁の解禁とともに、海がにぎわい始める。イカナゴの旬は、イカナゴがまだ稚魚であるわずか二週間あまり。この時期の鮮度の良いイカナゴの稚魚を用いた佃煮や釜揚げが人気を呼び、港の水揚げ場、魚屋、スーパーマーケットに至るまでその「稚魚」を求めて、早春の風物詩であるように多くの人々が列をなす。イカナゴの稚魚を手に入れた主婦たちは、香ばしい醤油の香りに包まれた家庭の台所で、砂糖、みりんなどを加えて煮込み、「イカナゴの釘煮」と称して各家庭のオリジナル佃煮作りに腕を振るう。その家庭の味は、毎年、この瀬戸内の春の訪れを楽しみにしている人々に、瀬戸内の春を告げる贈答品として全国に配られる。

東西約三百五十キロメートルの瀬戸内海の自然資源の恵みを受けたこのような〝旬〟の味覚は、東瀬戸内海海域に限らず、先人の知恵を受け継ぎ、環瀬戸内海エリアで、季節とともに〝旬〟の個性あるものとして多くが育まれている。

桜の開花とともに、本格的な瀬戸内の春が訪れる。宮城道雄の箏曲『春の海』は、中部瀬戸内海の名勝「鞆の浦」の海をうたわれたものと聞く。優しい陽光が海面いっぱいに降り注ぎ、緩やかな曲線美を描く緑の島々、心地よいそよ風とともに春いっぱいの潮の香りが漂う浜

古きよき時代の風情を残す瀬戸内の港町の町並み

辺や港。春の瀬戸内独特の平和で穏やかな雰囲気が醸し出され、のどかで明るい至福の海を感じるのは私だけではないと思う。

四方を外洋に囲まれた島国日本だが、瀬戸内は様相が異なる。閉鎖性水域で四季折々の独特な環境の中から生まれてきた風情そのものが、瀬戸内海の魅力とも言えよう。ドイツの学者シーボルトは、瀬戸内海を視覚でとらえ、美しい風景・風情を絶賛したことで有名だ。

わが国では、わずか百年あまり前までは、陸上（オカ）の道は獣道程度のものが主流だったが、瀬戸内海は、古くから交通の要衝として栄え、沿岸各地の港がにぎわい、物流・交通の要衝であったことは紛れもない事実である。各地の港は今でいうターミナルの役目を果たし、全国津々浦々を行き来する人々の交流の拠点としても繁栄してきた。

だが、近代化の波とともに瀬戸内海の「海の道」は大きく様変わりし、にぎわい栄えた港は面影を変え、その機能や役割も徐々に変化してきた今日である。

しかし、いま一度、広く瀬戸内海に目を巡らせば、恵まれた自然、長い歴史の中で培われた特有の文化や遺産など数え切れないほどあり、「宝庫の海」とも表現できる魅力を持った海域だ。

この素敵な瀬戸内海を、わずか百年ほどの変貌で良しあしを判断すべきではないと考える。これからの瀬戸内海は、今後の方策次第であらゆる分野で、チャンスが持て、数々の可能性を秘めた海域であると言える。

日本の地中海？ エーゲ海？ オンリーワンの「テーマパーク 瀬戸内海」

瀬戸内海は「日本の地中海」とか「エーゲ海」などによくたとえられている。南ヨーロッパの、さんさんと降り注ぐ太陽の下でのリゾート地などがイメージされ、これを瀬戸内海に当てはめ表現したものだろうか。

地中海やエーゲ海は、確かに魅力的な海域には違いない。ヨーロッパの文明・文化の創生に大きく培われ、その長い歴史を育んできた。しかし、これらの海は、地図上で見ても瀬戸内とはスケールが違い、閉鎖性水域で多島海の小さな瀬戸内海とは比較ができない。これらの海は大海であり自然条件や風土も大きく異なる。地中海は時化（しけ）ともなれば世界でも最大級の波浪が発生し、平穏な瀬戸内はその比にはならない。

瀬戸内海はどうだろうか。その名前の通り、多くの島々や陸との間の狭水道、潮流の速い「瀬戸」からこの海が成り立つと言ってもよい。海というより大河と表現したほ

和船と帆がよく似合う瀬戸内海

にぎわう瀬戸内海の古きよき港町

うがよい海域も多くあり、陸地と陸地をつなぐ水道の海とも言える。瀬戸内中央部「しまなみ海道」付近（芸豫諸島）においては、海の面積より陸地の面積のほうが広く、行き来する船はその迷路のような水道をすり抜けて航行する。島々や陸地の沿岸部では、瀬戸内式気候の恩恵を受けさまざまな作物が育ち、潮流の速い海域で育った身の引き締まったおいしい魚や多彩な水産物にも恵まれてきた。

瀬戸内海の航海では、強い潮流の影響を受ける。昔から船乗りたちは、その潮流をうまく利用し、川下りをするかのように潮の流れを活用し、一潮、二潮に乗って航海をしてきた。瀬戸内航海では、その潮流を読む技術こそ船乗りたちの重要な航海術であり、もし、その潮流と逆らって航行しようものなら、倍以上の時間と労力がかかるものであった。

そんな昔の航海では、一日四回、約六時間ごとの潮の干満とともに海水の方向を転じる潮流を利用するため、「潮待ち港」が当時の船の速力と航海時間を物語るように適所に栄えた。当時から使われた各地の「潮待港」（津）は今なお、その面影をしのばせ、瀬戸内航海全盛期の瀬戸内「海文化」のルーツを探訪することができる。

瀬戸内海の魅力を一言で表すと、春夏秋冬の四季がもたらす、恵まれた自然環境（陽光、季節風、変化に富んだ寒暖差、適度な雨、乾湿など）から演出される独特の風景と、地理的にも他に類のない個性ある水域と陸域から形成された海と表現できる。

広い水面の海（灘）、瀬戸（水道）、そして古くから潮待ちなどで栄えた港（津）、特有の産物。これは決して海域だけのものではなく、沿岸、島々との程よい融合から出来上がったものであると考えられる。瀬戸内海は、見方によっては魅力あふれる世界屈指の〝クルージングゾーン〟であり、オンリーワンの「テーマパーク」とたとえられよう。

〝瀬戸内海人〟たちの「瀬戸内アンカレッジネットワーク」

日本の二〇世紀の一大事業でもあった瀬戸大橋の開通は、「島国ニッポン」のメインランド、本州と四国が鉄道、自動車道で結ばれた歴史上の大事業でもあった。海を隔てた本州、四国は陸路の一本の線で結ばれ、双方から瀬戸内を海路で行き来する船の活用が大きな転換期を迎えたのもこのころであった。

私たちセーラー（船乗り）たちは四国、讃岐の像頭山に鎮座する海の神様「こんぴらさん」へのお参りが、江戸時代の参拝と同様、〝こんぴら舟舟追い手に帆かけてシュラシュシュシュ……〟と海を渡って四国に渡るというのがごく当たり前だったが、瀬戸大橋の開通で瀬戸内海を行き来してきた船

乗りたちの交通概念が大きく変革した時でもあった。

私は以前から交友があった金刀比羅宮の宮司さんや神官に、「瀬戸大橋の開通で、世間が瀬戸内海に目を向けている時こそ、この海への認識を深め、二一世紀への魅力ある将来像が持てる、新たな構想を持つべきではないか」との相談を持ちかけた。この構想は、「瀬戸内海洋文化構想２００１」と称され、瀬戸内海の将来に向かって何を行うべきかを問いかけることから始まった。

まず、私たち環瀬戸内海各地で海を舞台に多様な分野で活躍する若いエネルギッシュな有志たちが金刀比羅宮へ集合、お宮の協力のもとで「こんぴらサミット」を開催。瀬戸内海への夢を託した、ヒューマンネットワーク「瀬戸内アンカレッジネットワーク」が結成された。

アンカレッジとは舟の錨泊地を表す言葉であり、その瀬戸内各地のアンカレッジの人々の絆を結んだネットワークが「瀬戸内アンカレッジネットワーク」である。

瀬戸内各地で活躍する漁業者、海事関係者などのプロのシーマンから、レジャーシーマン、旅館経営者、公務員、そして神官までが参画。「自分たちが住む瀬戸内の自然を守り、瀬戸内海で活動する自ら

瀬戸内アンカレッジネットワーク
「瀬戸内海洋文化構想 2001」への歩み
1989～2002年（平成元～平成14年）

1989年（平成元年）
6月　瀬戸内文化構想2001始動「第1回こんぴらサミット開催」<金刀比羅宮社務所>
9月　国際マリーナ会議へ参加、瀬戸内アンカレッジネットワークをアピール
「第1回国際マリーナ会議」<大阪国際会議場>

1990年（平成2年）
「瀬戸内アピール」　日米ジョイントスタディー　<客船「ふじ丸」船上>

1991年（平成3年）
発起人会（広島総会）開催　<広島県宮島>
11月　国際港間交流行事「インターポート91」を主催
（東瀬戸内海～中部瀬戸内海域）

1992年（平成4年）
5月　小豆島内海町草壁港での大ランデブー
JCN（ジャパン・クルージング・ネットワーク）共催・協力
6月　瀬戸内アンカレッジネットワーク総会（第1回）開催
兵庫県家島町男鹿島　<中村荘>
8月　インターポート92（開催国　カナダ・バンクーバー港ほか）に参加
〝瀬戸内アンカレッジネットワークトロフィー赤道を越える〟

1993年（平成5年）
7月　第2回定例総会開催　<岡山県笠岡市飛鳥「大飛鳥」民宿山本>
「山と海の子たちのふれあいクルーズ」

1994年（平成6年）
2月　インターポート94（ニュージーランド・オークランド）に参加
6月　第3回定例総会開催　<笠岡諸島「真鍋島」ユースホステル〝三虎〟>
12月　オートキャンプ場の運営を中心に活動する内陸部のメンバーとの交流

1995年（平成7年）
1月　阪神淡路大震災　被災地への救援物資輸送協力、支援活動
6月　日本初の民間練習帆船「海星」瀬戸内巡航時の協力、歓迎行事の開催
12月　第4回定例総会開催　<岡山県倉敷市>

1996年（平成8年）
1～2月　NHK瀬戸内紹介番組「瀬戸内海旅行団こだわりクルーズ」に全面協力
7月　「第2回こんぴらサミット」第5回定例総会開催　<金刀比羅宮社務所>
打瀬船「内海丸」瀬戸内幟　リレーキャンペーン」を主催
8月　世界の海の写真展「光　優　海」開催
10月　小学校の新しいカリキュラム研究への協力
（横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム）
〝小学生の海・漁業に関する体験モデル学習への協力および授業への参加〟

1997年（平成9年）
11月　〝道中日記　瀬戸内再見の航海〟、大分県鶴崎～大阪淀川河口
12月　第6回定例総会開催　<姫路市木場港>

1998年（平成10年）
6月　瀬戸内シンポジウム参加
7月～平成11年1月　「海域を生かしたスポーツ機能整備による地域づくり」
岡山県日生町における調査研究委員として参加

1999年（平成11年）
6月　第7回定例総会開催　広島県内海町横島　<横島漁協会議室>

2000年（平成12年）
8月　海の絵画展　〝すばらしいヨット旅行〟、展を金刀比羅宮社務所で開催

2001年（平成13年）
10月　インターポートジャパン2001を開催

2002年（平成14年）
3月　国土交通省による「海の駅」モニターツアー、"海の駅フォーラム"への参加
広島～大崎下島　<豊町「ゆたか海の駅」>
5月　「海の駅」"ボートサミット"の開催、協力
9月　全国町並みゼミ「鞆の浦大会」への参加、協力
12月　2002鞆の浦ミーティング

その他の活動
・瀬戸内海クルージング等瀬戸内海に関わる報道（テレビ、新聞）ほかマスコミへの取材協力およびロケーション協力
・瀬戸内海環境保全に関する書籍・機関誌への投稿および協力
・瀬戸内での海洋スポーツ活動への協力サポート
（ヨットレースの運営サポート、クルージングサポート）
・青少年の海洋教室、海洋スポーツ活動への支援および協力（サマーキャンプ、修学旅行）
・海外からのクルージング、瀬戸内訪問者への支援およびクルージングサポート

の職業や趣味への展望を持ち続けたい」という思いの衆（海人たち）が環瀬戸内海のヒューマンネットワークとしてつながり、瀬戸内アンカレッジネットワークは活動を開始した。

そのころ、国内はバブル経済が到来し、「ウォーターフロント」の再開発という掛け声の中で官民を挙げて有頂天になっている時でもあり、瀬戸内も多分にその開発のターゲットになっている時でもあった。

瀬戸内アンカレッジネットワークと「瀬戸内海会議」

海の神様「こんぴらさん」で瀬戸内アンカレッジネットワークが産声を上げてから、二十年余、その間、変化する社会情勢の中でその取り組むテーマもさまざまで数々の活動を行ってきた（前ページ表参照）。これらの活動は、瀬戸内というローカルで活動する人々が、自分たちの活動する地域である瀬戸内の魅力を、全国・世界を視野に入れ発信していきたいという思いで取り組んできた。

ローカル色豊かな個性ある自然体の瀬戸内の姿こそ、世界に誇れる大きな資源である。この環境を生かして自らの活動に取り組んでいくことが、瀬戸内アンカレッジネットワークのポリシーでもある。

近年の観光ブームの中で、瀬戸内海も注目されてきている。昔から観光地としてにぎわってきた場所を除き、多くの海岸線や島々まで無機質なコンクリートの堤防で囲まれ、風光明媚な自然海岸の多くは、殺伐とした埋め立て地と化した所も少なくない。だが、最近、歴史ある古い港町や、寂れつつある島しょ部などにも訪問客が増えてきているようだ。まさにアンカレッジネットワークのメンバーたちが活動している地域などがその新しい観光のターゲットになりつつあるのだ。

二〇〇四年、アンカレッジネットワークの呼びかけで、瀬戸内海の観光を視野に入れ〝瀬戸内を楽しむ・守る〟をメインテーマに、古巣の「こんぴらさん」で「第一回瀬戸内海会議」を開催した。アンカレッジネットワークのメンバーのみならず、老若男女、全国・世界中からの参加者を得て、今後の瀬戸内観光などについて熱い論議を交わし話題を呼んだ。その後アンカレッジネットワークは、「瀬戸内海会議」で決議した事業、ビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）活動の一環として、瀬戸内の魅力を世界に発信する英語版ホームページ作りを行い、瀬戸内海の魅力を世界中に発信している。

（http://www.anchorage.jp/setouchi/）

「瀬戸内海会議」も回を重ね、今年二月には、「第三回瀬戸内海会議」を開催。今年は国を挙げてクルージングや海の観光の活性化を目指し、全国に展開されつつある「海の駅」などをテーマに開催された。「瀬戸内海会議」は、会議を重ねるごとに瀬戸内海

瀬戸内海の将来について熱心な意見が交わされた瀬戸内海会議（金刀比羅宮にて）

の新たな展開への意気込みが熱くなってきている。

視点を変えた観光の再考
クルージングと瀬戸内の観光

瀬戸内アンカレッジネットワークの出発点は、瀬戸内でのクルージング活動の振興である。一般的にはクルージング活動とは、ボートやヨットで楽しむクルージングや、大型客船などで船旅を楽しむことであるが、これらはまだ一般へのなじみは浅く、その活動を楽しむ人口は少ない。クルージング文化が浸透していないと言ってもよいと思う。

しかし、日本においても海路が主な交通網であった時代はクルージングが盛んだった。そのころのクルージングは点から点への移動手段であったが、これからは、クルージング（船旅など）そのものを楽しむ時代である。瀬戸内海は新幹線や飛行機を使用するとすればわずか数分、数時間で移動できるサイズだが、この海をゆっくりと時間をかけて巡ることで、瀬戸内の自然、港、島々、町並みなどを楽しむことができ、そして各地の歴史・文化に触れ、人々との出会いを得ることができる。だからこそ、瀬戸内海の魅力が再認識され、新しい動脈としてクルージングがクローズアップされてくるものと考える。

最近エコ・ツーリズム、スローライフなどと言葉で表されているが、クルージングライフの創生こそが、これからの観光においても必要ではなかろうか。

名所旧跡を駆け足で巡り、観光地やイベントなどを追いかける観光から脱して、自らの感性で作り上げ、自らの時間を楽しむクルージングの楽しみと同じく、今後の観光も同様な仕組みづくりと楽しみ方が大きな鍵を握っているのではないだろうか。

瀬戸内海での観光振興が、自然破壊を防止し、いつまでも魅力ある瀬戸内の自然保護につながっていく良いサイクルになっていくと、我々は信じている。

（せのお　たつき）

瀬戸内アンカレッジネットワーク
http://www.geocities.jp/senoodesu/anchorage

瀬戸内海の自然を生かしたアンカレッジの風景（小豆島）

クルージングでアンカレッジを楽しむ

連載Ⅰ
あの町この町
第27回

鬼棲む里――岡山県・井原市美星町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

「吉備」は山陽地方の古代国名である。ごくあいまいな名称であって、吉備高原といえば中国山地の南側一帯をさすことになるが、一般には岡山県中部から広島県東部のエリアをいうようだ。標高はせいぜい二〇〇から六〇〇メートル。地理学では「隆起準平原」などとよばれている。

はじめて吉備高原を歩いたとき、いいしれぬ感動をおぼえた。春先のことで気候温暖、瀬戸内から山陽地方に特有のやわらかな青空がひろがっていた。吹く風はやさしく、枯れ草と土とが香ばしいような匂いをもち、鼻先が少しむずがゆい。

あきらかに肌でなじんだ風土なのに、まわりの景観が日本ではないかのようだった。点々と民家がちらばっていて、黒い瓦屋根と白っぽい土壁。主屋に寄りそうように大小の納屋。これもまたいたって日本的な農村風景にもかかわらず、全体のたたずまいが、どこか大陸的なのだ。日本ではなく、どこか中国の農村に立っているかのような気がした。

むろん、そんなはずはない。新幹線新倉敷駅から車で北西に約一時間。ひろびろとした水田を抜けると山地にさしかかり、赤松の山裾をかすめていく。小さな峠を三つばかりこえた。振り返ると瀬戸内海が見えた。白々とした海面をさえぎって、まるで幻の軍艦のように水島臨海工業地帯の赤茶けた煙突群がひしめいていた。

トンネルを一つ出ると、またもや水田があらわれた。こちらは帯状に細長くつづき、おりおりはとぎれながら長い狭間をつくっている。山陽道というと海沿いの道を連想するが、古代から近世にかけての旧山陽道は、この山あいの狭間を縫っていたそうだ。

矢掛（やかけ）といって、その旧山陽道の宿場町があらわれた。少しうねった道の両側に、おおかたが妻入りの町屋がズラリと軒を接している。立派な大戸をもった間口の広い家は、本陣とか脇本陣とかよばれていたのではあるまいか。

古い町並みを出ると、ゆるやかな丘陵地帯に入っていった。道がたえまなくクネクネ曲がるのは、隆起状の地形が複雑な凹凸をつくっているせいだろう。一つをこえると、また一つ、前方にはいつも半円の高まりが待っていた。

最後の高台をこえたとたん、やにわに不思議なパノラマがひらけた。高原のたたずまいは同じでも隆起がゆるやかな無数の波をつくり、低いところは水田、その上は畑、さらに上に民家が点在する。どの家も背後

に黒々とした林をもち、それぞれの繁みの守り神のようにして古木がニューとそびえていた。

大陸風の印象を受けたのは、水田・畑・人家・林が一つのセットをつくり、多少とも変化しながら、均等の単位がどこまでもつづくように思えたからだ。箱庭的でありながら、よく似たセットがプラモデル風にかさなって、空間が何倍も大きく見える。はからずも「中国地方」と名づけられた島国の一点が、まさしく中国大陸の一角のように思われた。

つい先年までは美星町といった。キャッチフレーズが「星の降る町」。吉備高原のただ中にあって、たしかに夜ともなると満天の星があらわれた。

いまも変わらず星はあらわれるが、「平成の大合併」で現在は井原(いばら)市美星町。星の等級が一つ減じたぐあいで、こころなしかキラめきぐあいがややかげりをおびた。

こういったケースでは、きまって「由緒ある地名が消された」といった嘆きが口にされるが、美星町の場合はあたらない。「美星」といった多少とも宝塚的な文字づかいからもうかがえるのだが、由緒とは縁がない。昭和の半ば、いわゆる「昭和の大合併」にあたり、美山村ほか三村が一つになって町制をしいた際、中央部の美山と星田の頭文字をとって「美星」とした。しごく簡単な方法で地上に美しい星の町が出現した。

そんなしだいであれば、西隣りの井原市に呑みこまれるように再度の合併をして、行政上から名前が消えたとしても、さして惜しむまでもないのだろうか?

いや、ちがうのだ。合併促進の旗を

吉備の里

振っていた中央官庁はそうかもしれないが、町の人にとっては決してそうではないだろう。「美星」の歴史はたかだか半世紀としても、それは一人の人間がもの心つき、成長し、老いを迎える歳月とほぼひとしい。一代かけて町づくりに励んできた。知恵を出し合い、さまざまな試みをして、ようやく一丁前のきざしを見せはじめた矢先に、一代の努力が財務や効率の名のもとに、あっけなくご破算にされたぐあいなのだ。

旧四村のうち三村が小田郡、一つが川上郡に属していた。郡境をこえて合併をしたのは、それだけの理由があったからで、四村とも東の矢掛町や西の井原市、北の成羽町からほぼ等距離でへだたっている。いずれも外まわりの「辺境」であって、このままでは発展が望めない。むしろ内側に集束して新しい町づくりをめざしてはどうだろう?

合併に先立ち旧四村が合議して学校をつくった。美星農業高校であって、この名はまず学校名として誕生した。たしかに「美しい星」は若々しい教育の場にふさわしい。ついては未来の星のための砦から、暮らしの砦としての新しい町づくりへと、ごく自然に発展していったことがうかがえるのだ。

ラドン温泉鬼の湯荘は美山川沿いにあって、白い瀟洒な二階建て。「鬼の湯」などと恐ろしげな名前は、名勝鬼ヶ嶽にちなんでいる。旧美星町の東のはしにあって、二つの山が迫り、その山肌を針のように尖った岩が埋めている。

「奇岩累々トシテ天ヲ指シ、松風粛々トシテ鬼気肌ニ迫ル」

昔の文人なら、お得意の漢詩をよんだのではあるまいか。

実をいうと小ぶりの岩山であって、とりたてて名勝というほどのものでもない。「鬼ヶ嶽」の名は、どちらかというと言い伝えが生み出したのではなかろうか。むかし、鬼の温羅族がこの山に棲んでいて、大和朝廷から派遣された四道将軍吉備津彦命と戦った。鬼たちは傷つくと山に湧く霊泉につかり、頑強に抵抗したという。

吉備高原一帯によく似た言い伝えがあって、温泉はたいてい鬼伝説をそなえている。とりわけ吉備津神社の「お釜殿」は有名である。上田秋成の『雨月物語』にも出てくるが、鬼の温羅を征伐して首を晒したところ、その首がなおも激しく吠えつづける。そこで吉備津彦命は首を犬にくわせ、ドクロをお釜殿の下に埋めた。そこでは現在もなお、「釜鳴神事」がおこなわれている。かまどに鉄の釜をかけ、巫女が松葉を焚いて米を蒸す。そのときの釜の鳴る音で吉凶を占う。

古代の吉備国はゆたかな鉄によって富み栄えた。強大な軍事力を擁して瀬戸内海を掌握し、大和朝廷に対抗した。とどのつまり大和の軍門に下ったわけだが、歴史は勝った側がつくるため、敗者は鬼の汚名を受けなくてはならない。

新しく町政が発足したあと、町の呼びものに鬼ヶ嶽が一役買うことになった。麓を流れる美山川はゲンジボタルで知られている。鬼が傷を癒やした霊泉がラドン温泉となり、町営がやがて第三セクター方式に改められた。天然ラドンが豊富なアルカリ泉で、湯船は「鬼の行水」にはじまり、「鬼の河原」「鬼の指圧」「鬼の釜」「鬼の肩たたき」など計八種類。おしたり、もんだり、ほぐしたり盛り沢山だ。

欲ばって八種を征したのはいいが、湯疲れしてソファーに倒れていると、売店のおばさんに「イカリソウセンベイ」をすすめられた。美星銘菓で食べると元気が出る。町が考え、町の人がつくっている。

袋に印刷された説明によると、中国の伝説に、淫羊という獣がいて、一日に百回も交尾をする。それというのも「藿」と

いう草を食(は)むからで、この草が世にいう「淫羊藿(かく)」、つまりはイカリソウ。星の降る町美星町にはオオバイカリソウが自生しており、そのエキスを加えて焼きあげたもの。

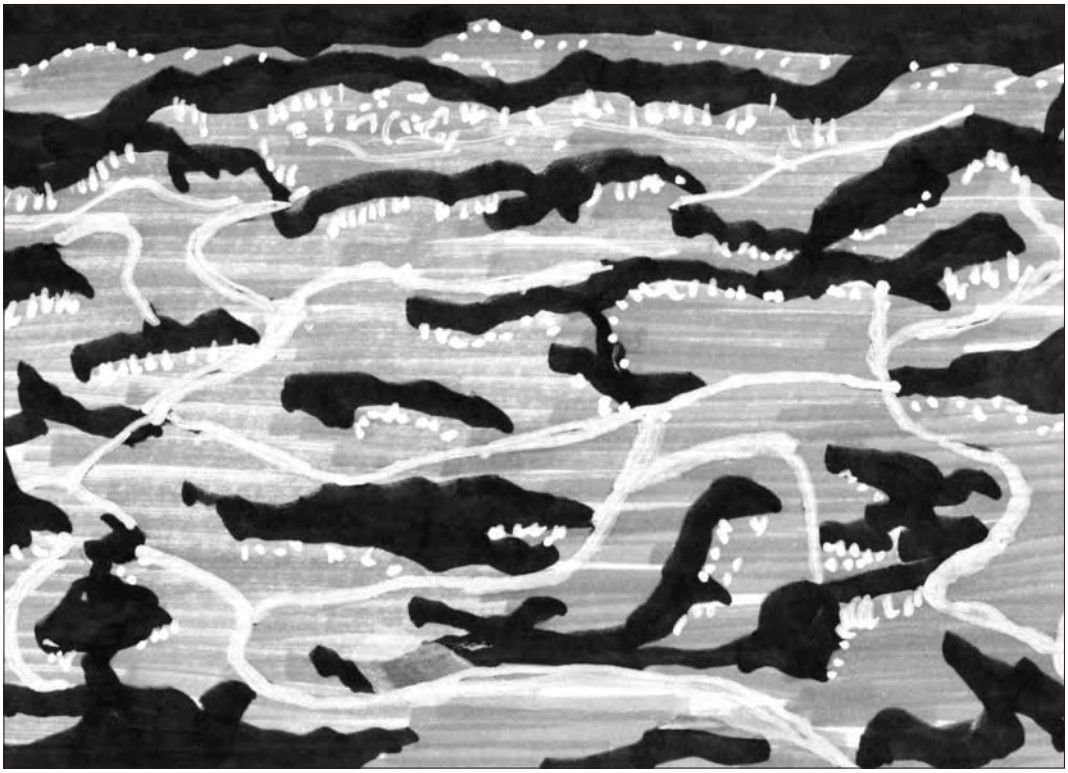
ためしにいただいたが、パリリとして香ばしい。もはやこちらは精力絶倫の獣にあやかる必要など少しもないが、なにやら元気をもらったぐあいで、だらしなく倒れていたのが起き直った。

はじめて美星町の景観を目にしたとき、水田と畑と家と林がセットになっているように思ったが、あながちまちがってはいなかった。当地の農家一戸あたりの耕地面積は約一町（一ヘクタール）であって、おおかたがその程度だという。そのうち水田が五、六反、畑が四、五反。これは家によって「デコボコ」がある。高台寄りは畑が多く、谷寄りは田が多い。

いずれにせよ規模は大きくないが、それなりに自給はできる。豊かではないが貧しくもない。大地主がいないかわりに、かつての小作人にあたる人もいない。土地全体がおおらかで、のどかな感じがするのは、高原地帯に実現した小共和国の性格によるのかもしれない。

旧美星町は四方の周辺四村が一つになった結果、ややタテ長の円形にちかい形をしていた。その中心にあたる三山(みやま)に、役場、学校、病院、郵便局などをつくった。町域のどこからも近い。旧山陽道から枝分かれした道路も三山で四方から集まってくる。暮らしの上できわめて合理的な町の構造をとっていた。

里を歩いていると「部落」という言葉がつねに出てくる。マスコミではタブーに



美星町・鳥瞰図

なっているが、この一語なしには土地の何ひとつとしてわからない。林のことをたずねると、「あの部落のもんに訊くとよろしい」。祭りのことに及ぶと、「今年はあちらの部落が当番だ」。吉備高原にいちじるしい特徴だろう。たとえば「部落有林」というのがあって、一つの部落が林の既得権をもっている。いくつかの部落が共有するのもあって、これは「財産区林」とよばれる。旧村有林もなくはないが、それはほんのわずかで、部落有林、財産区林が圧倒的に多いのだ。

社会学では中世的な「ムラ」の結束力が近世の政治力に影響されず、強固に生き残った、といった説明がされるのではあるまいか。既得権として獲得して、それを以後のどの時代にも申し渡し事項として確保してきた。旧四村が合併して美星町を発足させたときにも、旧来の部落有林などは一切変更しない旨の協定事項を確認した。

その林は燃料と資材をもたらすだけではない。吉備高原の山々は「まつたけ山」として、その筋から別格扱いされていた。当地産の松茸は京阪神の市場で、いつも最高値で取り引きされた。

町づくりにあたり、人々はいわば「隠し財源」といったものをもっていたわけだ。見たところ部落はかなりの斜面に形成されていて、生活の条件は悪そうだが、決してそうではない。土地によっては部落有林、財産区林のほかに任意加入の共有林を所有していて、延面積六〇町歩（六十ヘクタール）に及んでいる。それがもたらす共有資金で祭礼などの共同行事をした。備中神楽が盛んなのは、このような経済的基盤による。共同行事だけでなく、個々の人の医療費や学費の補助も行ってきた。部落の助けで進学したという人も少なくないのである。

公民館に旧美星町の航空写真が掲げてあった。白っぽい畑と水田につつまれて、海のなかの島々のように青黒い林がひろがっている。そこにかたまりをつくって集落が点在する。畑・水田・人家・林は個々のケースのワンセットというだけでなく、旧美星町全体に四者がほどのいい比率をとって構成されていることが見てとれる。

西隣りの井原市は「備中小倉織」の発祥地で、機業地として三百年の歴史をもち、中心地に小工場が集中している。

しかし、織物不況がいわれて久しく、商店街はかなりがシャッターの下りたまま。大通りにも人かげがない。

北西の芳井町、北東の美星町が加わって、新井原市は左右の先端がツノのようにのびた奇妙な形をしている。どこでも見かけるところだが、新市のスローガンには「財政の健全化」「効率的な行政運営」「総人件費の削減」がうたってある。

およそ性格のちがう町と一つになって、「星の降る町」をひそかに支えてきた旧来の協定はどうなるのだろう？　古くさい習わしとしてなし崩しにされていくのだろうか。

旧美星町で地域の運動にたずさわってきた人が語っていた。町の自立のためにさまざまな形で協力し、提言し、知恵をしぼった。あの努力はいったいどこへ消えたのか？

「鍵は〇〇様にあずけてあります」

公民館のドアに紙が貼ってあった。足元のコンクリートのすきまから雑草がのびている。ガラスごしに中をのぞくと、灰皿代わりのバケツにタバコの吸い殻。どことなく荒廃感がただよっている。

ちょっぴり沈んだ心もちで歩き出した。まっ青な空とポカポカ陽気。ゆるやかな段差をもった田と畑。エプロンをつけ、手拭いを姉さんかぶりにした女性が、畑の手入れをしている。石垣を築いた上に白壁が見え

る。風ひとつない。自分の足音がポクポクと聞こえるだけ。

何かの本で読んだのだが、鬼の字には「厶」がついている。この「厶」は「私」の古字で、公私の別というときの「私」にあたる。おおやけごととわたくしごと。「厶」のつく鬼はわたくしごと、つまりは「見えない存在」ということになる。そういえば魔物・魔術など、正体のわからぬものには鬼がついている。魅力の「魅」の字にも鬼がいる。ひきつけ、化かし、まどわせる。

春祭りの準備らしく、掲示板に「当番組」の予定が貼り出されていた。トントコ　トントン―。　備中神楽の太鼓がよみがえってくる。土地の人はみんな神楽太鼓の音律をからだにしみこませているそうだ。

トントコ　トントン
トントン　トトトト
トトトン……

太鼓の音が耳から離れないのを「太鼓酔い」というらしいが、誰もがこの酔いを知っている。鬼棲む里の天地はどこまでもひろく、のびやかで、春の陽気がポカポカしていた。それはまさしくポカポカというしかないのどかさだった。

（いけうち　おさむ）

神楽の名士たち

連載Ⅱ
明治のジャパノロジスト
F．ブリンクリーの
「美しい国ニッポン」⑥

ジャポニスムの震源で日本画手習い

旅行ジャーナリスト
沢木　泰昭

「西洋文明に追いつけ」がスローガンだった明治政府――。脱亜入欧策は芸術分野でも例外ではありませんでした。

音楽教育は洋楽が中心に。三味線や尺八など庶民が楽しんだ邦楽が義務教育の教壇に戻ってきたのはごく最近のことです。

美術は狩野芳崖ら狩野派や円山派、仏師系彫刻家だった高村光雲など支配階級・富裕層にお抱えされた人と作品が「日本の伝統」として明治政府に守られました。

これに反し、浮世絵、錦絵、戯画など庶民が好んだ作品は、官製の「美術」から削除されてしまいます（佐藤道信『明治国家と近代美術』）。

美しいニッポンの審美眼

フランシス・ブリンクリーは「民」の美術にも注目します。一例をあげます。

『西洋道中膝栗毛』の挿絵などで文明開化を痛烈に風刺した河鍋暁斎（一八三一～八九）。最近、各地で作品展が開かれている明治の反骨の絵師です。ブリンクリーはそんな暁斎と肌合いが良かったのか「ブレンキ君」と呼ばれるほどでした。弟子入りして自宅で日本画の手習いを受けます。

弟子仲間だった建築家ジョサイア・コンドルによれば、ブリンクリーは暁斎に多くの絵を特注し、優美な画帖や額装に仕上げて所蔵していました。ブリンクリー、コンドル、医師E・ベルツら元お雇い外国人仲間は、暁斎の理解者であり、ファンであり、有力なパトロンだったようです。

明治の「美術」から除外された暁斎にとって彼らは心強い存在だったに違いありません。それはまた、西洋化に猛進する明治政府のもとで「美しいニッポンの文化」を注視していた彼らの審美眼がもたらした結果にほかなりません。

E・ギメ、F・レガメー、E・モースなど暁斎の周辺に現れた画家や学者は少なくありません。一八八七年（明治二十年）には英国から来日した画家モーティマー・メンビスがブリンクリー宅で暁斎に会っています。これらが契機になって暁斎の名前が欧州で知られるようになり、作品が海外に紹介され、流出していきます。

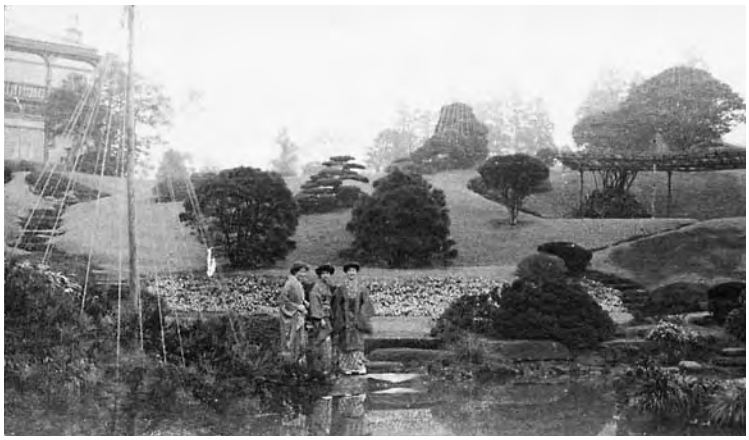
ブリンクリーが日本美術に興味と関心を持てたのには、維新政府が「民」の美術を切り捨てたほかにも理由があります。当時の外国人優遇策です。工部大学校に数学教師として雇われたブリンクリーの月給は三五〇円。大久保利通が五〇〇円でしたから、大臣なみの高給です。宿舎も与えられていたので、いわばセレブの生活は保証されていました。

そのころ、「美術」枠から外された浮世絵や陶磁器などは、二束三文で維新の街なか

にあふれていました。外国人による絵画・陶器・工芸品の買いあさりが始まります。これが欧州のジャポニスムに火をつけ、印象派の画家に影響を与えることになります。ブリンクリーはその震源地にいたわけです。

和魂洋才と脱亜入欧のはざまで

ブリンクリー・コレクションの多くは自宅火災で焼失。死後、一部は東京府、一部はボストン美術館、一部は英国の美術館に収められているといわれています。また、手元に残った作品は次男のジャック・ブリンクリーに引き継がれましたが、これも関東大震災と太平洋戦争で消滅します。



東京・広尾のブリンクリー邸。九千坪の日本庭園に洋式の邸宅。ジャポニスムの発信地でもあった

コレクションの多くは灰燼に帰してしまいましたが、ブリンクリーはコレクターとして、陶芸の目利きとして、美術評論家として、ジャパノロジストとして、日本紹介の文献を多数残します。

『東洋叢書』（一九〇二年）、『大英百科事典（ブリタニカ）9版』（同）、『歴史家の歴史』（〇八年）などで絵画、陶芸、漆器、刀剣、面などについて詳述しています。これらの著作を含んだ集大成として『日本民族史』が没後一九一五年（大正四年）にロンドン・タイムズから刊行されています。

同書は七四八ページという大作で、神話、歴史、地理、伝統など日本人の精神的な所産を詳しく紹介し、第二次日英同盟締結（一九〇五年［明治三八年］）に至る政治・社会情勢もジャーナリストの目で客観的に伝えています。

来日六年目の一八七三年（明治六年）に著述した『語学独案内』、九四年（明治二七年）刊行の『和英大辞典』（三省堂刊）が〝洋才〟をもとにした日本人への橋架けだとすれば、『日本民族史』は〝和魂〟による西洋へ向けた日本文化の発信です。

ブリンクリーの足跡再発掘

脱亜入欧を進め、軍事力増強で一流国の仲間入りをしようとする日本の行く末を案じながら、ブリンクリーは一九一二年（大正元年）十月、東京・広尾の自宅で亡くなります。七一歳。安子夫人とともに東京・青山墓地に眠っています。

独身の英国武官補として気軽に来日し、日本人と日本文化に魅せられて四十五年間。母国・英国には一度たりとも戻りませんでした。

フランシス・ブリンクリーの足跡はややもすれば見失われがちですが、近世日本を客観的に目撃した観察眼と日本文化への理解は再評価されてもよさそうです。

昨年三月に放映されたNHK・BS特集『世界から見たニッポン』では、没後一世紀を経てブリンクリーの視点が再発掘、紹介されました。三十年ほど発行人を務めた英字紙『ジャパン・メイル』は今、エディション・スナプス社が復刻版の刊行を続けています。

［了］

（さわき　やすあき）

連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り48

チベット問題と観光

旅行作家
山口 由美

自然と文化を尊重する エコツーリズムを

北京五輪の開催が近づき、チベット問題への国際世論の波紋が広がっている。最初にラサで暴動が起きた時から、私は、以前に見た、あるテレビ番組が思い出されてならなかった。

ＮＨＫのドキュメンタリー番組「聖地に富を求めて」である。物語は、漢民族のホテル経営者と、ホテルの歌舞団に雇われたチベット人青年を中心に展開していく。経営者は、ホテルの従業員に能力給を導入し、彼らの実家がある山奥の村にホテルで販売する骨董品を買いつけに行き、ホテルのイベントとしてラマ僧の宗教儀式を企画する。

それぞれの出来事は、世界のどの国であろうと、観光地のホテルが行う可能性のあることである。宗教儀式をホテルのイベントにするのはどうかと思うが、フラダンスのような民族舞踊や、なまはげなどの伝統行事も、もとを正せば、ある種の宗教行事である。その意味では、経営者の行動を非常識とは言い切れない。

それなのに、番組を見た後、不快な印象ばかりが残ったのは、なぜなのだろう。それは、ホテルの経営者が、ラサがチベット仏教の聖地であることを利用して商売をしながら、その文化に対する理解や尊敬の念がまるでなかったように見えたからだと思う。

チベットで起きているあつれきの原因のひとつが、番組のホテル経営者に代表される漢民族の大量移民であるといわれる。近年、一九五〇年代のチベット侵攻以来の弾圧に加えて、経済力による漢民族のチベット人支配が強化されている。漢民族の経営者に文化の誇りをもぎ取られているように見えるチベット人の姿は、暴力を受けて血を流している姿より、ある意味、心痛むものだった。

そして、移り住んだ漢民族は、チベットで唯一の産業である観光業を営む。今回のチベット問題の根っこには、少なからず、近年のチベットの観光化も影響しているように思えてならない。

実際のところ、独自の文化を持つ国や地域の観光において、経営主体がその民族ではないという逆転はよく起こることだ。現代社会において、「エキゾチック」と見なされる異文化とは、往々にして、現代のグローバリズムとは対極の価値観を持つ民族にあることが多い。そして、そうした民族は、

商売は得意としない場合が多いのである。

例えば、フィジーでも、観光地としてのフィジーがフィジーである理由は、フィジー人の文化があるからだが、ホテルや土産物屋の経営者は、ほとんどがインド人（フィジーの人口は、フィジー人とインド人がほぼ半数ずつを占める）か、もしくはオーストラリアや欧米系の外資である。

それでもフィジーを旅していて哀しみを感じないのは、彼らの文化が、それなりに重んじられていると実感できるからだと思う。

観光が文化を踏みにじる手段にならないためにはどうすればいいのだろう。ひとつの風穴になるのが、昨今、話題になるエコツーリズムではないかと思う。

エコツーリズムとは、単に自然に親しむ旅ということではない。土地に根差した文化を尊重し理解する旅の形でもある。さらに言えば、経済力を持つ側でなく、文化を持つ側が主役の観光と言うこともできる。

アメリカやオーストラリアも、かつては先住民族のアボリジニやネイティブアメリカンを暴力で服従させた歴史を持つ。もちろん現在も問題がすべて解決したわけではないが、少なくともあからさまな暴力や差別は消えた。そして観光の分野では、彼らを主体にしたエコツーリズムが育っている。

エコツーリズムは、マスツーリズムと対極をなす考え方でもある。例えば、チベットと同じ仏教をバックグラウンドに持つ国・ブータンでは、一定額以上の旅行経費を義務づけることで観光客の数をコントロールしている。近年、スモール・ラグジュアリー・リゾートの雄・アマンリゾーツが進出して話題になったが、アマンがブータンに開業した最初の外資系ホテルであるということに、この国の観光業に対する姿勢が見える。単価の高いホテルのみ誘致することで、同じ収入に対しての観光客の数を抑え、環境に対する付加を軽くするのだ。これは、アフリカのボツワナなどでも行われているエコツーリズムの手法のひとつである。

チベットの観光化には、本来こうした手法がふさわしいのだと思う。エコツーリズムを志向する観光客は、マスツーリズムを志向する観光客よりも少なからず自然や文化を尊重する考えを持っている。

チベット問題を五輪と絡める是非も問われている。だが、中国の五輪開催が先進国としての最終試験であるのならば、力で民族をねじ伏せる姿勢を国際社会は無視するわけにいかない。異民族弾圧の悲劇は、今も地球上のあちこちにあるし、先進国と呼ばれる国で、そうした過去を持たない国はない。しかし、だからこそ、それを克服しようと努力してきたのが人類の歩みだからだ。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

現代社会の中で、温泉は「癒やし」や非日常を体感できる場所の一つとなっている。我々現代人にとって温泉地とは、と考えたとき、旅館、泉質、グルメ、周辺の観光スポットなどをすぐイメージしてしまう。温泉地の歴史や文化をじっくり調べて出かける旅行者は、まだ少数派だろう。夏目漱石、宮沢賢治、志賀直哉…の名作には、温泉地は欠かせない素材といわれる。文豪たちがこよなく愛した温泉をその舞台として数々の作品を生み出してきた「温泉文学」について、厳選しまとめた異色の紀行評論といわれるのが**『温泉文学論』（川村湊著、新潮社）**。著者は、「温泉の本質とはなにか。温泉文学は、わずか一遍だけ通り過ぎる旅人によって書かれるのではなく、その魅惑に首まで漬かってしまった人によって初めて書かれるような奥の深いものなのである」と指摘する。

本書は、近代以降の日本文学に表現された「温泉文学」を主な対象として、尾崎紅葉、川端康成、宮沢賢治、夏目漱石、志賀直哉などの文豪十人を取り上げている。著者は、本書で取り上げる温泉には必ず一度は訪れ、一度行った温泉でも改めて取材し、取り上げた本はもう一度読み返し、自分で紹介する湯には必ず入ることを原則として、文豪たちの創作活動の源泉を探ろうとしている。

本書内で著者が温泉文学の雄と称するのが、第五章で取り上げている夏目漱石『満韓ところどころ』。漱石は、江戸っ子のためかどうか分からないが風呂好きだった、という。『坊っちゃん』では、道後温泉が作品の舞台であることは知られているが、『草枕』の舞台「那古井」の温泉浴場は熊本県の小天温泉、「則天去私」を語ったのは修善寺温泉、『明暗』は湯河原温泉と各地の温泉を小説の舞台にしている。

また、漱石は生涯に二度外国旅行をしているが、その中で満州と大韓帝国とを回った旅行記『満韓ところどころ』では、ホテルや旅館で風呂に入っている場面が多く出てくる。「漱石のようにいちいちそれ（お風呂の話題）を紀行文の中に書くことはしないものだ。しかし、満州で温泉に浸かるという体験は、これは特筆に値するだろう。なぜなら、満州旅行は、まだまだ当時の日本人には奇聞・珍聞に属することだったからである」と評する。漱石の温泉地に対する強い愛着がつかみ取れる。

この本の見どころは、著者が文豪の訪れた温泉地へ赴き、湯に浸かりながら、文豪の創作活動の源泉を探ろうとしている点である。特に、著者自身が温泉に浸かりながら、自らも文豪と同じ環境に身を置くことで、原文を引用しながら、独自の視点で文豪たちを描写し、温泉文学を捉えようとしている点が非常に面白い。各章の最後の、【本】【湯】【汽車】の項では、本、温泉地、交通について紹介しており、一度訪れてみたいという気持ちに読者を誘うだろう。

これまで、さまざまな日本文学を読んできたが、本書の温泉文学という視点は、読んだことのない者にとっては非常に新鮮である。著者は「是非、温泉旅、汽車旅のお供に」と勧める。この本を通じて、改めて、いつの時代でも温泉が、いかに人々から愛され、非日常の空間であったかがよく分かる。また、多くの文豪たちが温泉地を創作活動の拠点としていたことは、新しい物を作り出す原動力を温泉から享受していたからだと言えるだろう。

いま一度、文豪たちの温泉地に対する思いを感じながら、今まで感じなかった温泉の魅力を楽しんでみてはいかがだろうか。（江口哲夫）

新書判　207ページ
定価　714円
新潮社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■**定期刊行物**

●**旅行年報**（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。

●**旅行の見通し**（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的変化。

●**旅行者動向**（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇七」では、「いまどき若者の旅行マーケット」「『旅行大好き』を探る」を特集。

●**観光文化**（年六回、奇数月二十日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。

●**Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）**
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

■**観光読本（二〇〇四年六月発行）**
東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から十年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■**その他刊行物**

●**美しき日本**
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三百九十一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）"Beautiful Japan"も発行。

●**産業観光への取り組み（二〇〇七年十月発行）**
新しいツーリズムとして注目を浴びる産業観光。その振興に向けた取り組み方を、国内外の豊富な事例とともに紹介。

※刊行物に関する問い合わせ、冊子をお求めになりたい方は
財団法人日本交通公社　観光文化事業部まで。
電話：03・5208・4704　http://www.jtb.or.jp

次号予告

●昨年五月、「里山条例」を都道府県で初めて制定した千葉県。次号の特集は、生物多様性に満ちた千葉県の里山の保全・整備・活用と観光立県へ向けた動きを紹介します。

調査研究だより

●近年、わが国では「人材育成」が高い注目を集めています。この背景にはさまざまな要因がありますが、観光分野においてもその状況は同様であり、「やはり、人材が重要」「人材を育てなければ」という声を各所で耳にします。その中でも、現在の社会経済環境において非常に重要な位置づけにあるのが、地域や事業体を持続的に「経営」していくことのできる人材です。

●当財団では経済産業省からの委託により、地域づくり、旅館ホテル経営の二タイプの「経営人材」に必要な能力および育成手法を、産業界や人材育成の専門家の皆様とともに、三年間にわたり研究してきました。そして、その成果を、全五分冊から成る教材と、分野に応じた能力育成手法として取りまとめることができました。

●当財団では、この成果を広く現場に普及させていくために、成果物である教材の市販化に取り組むほか、大学などの人材育成機関と連携して、または当財団の事業として、特に、現在の経営人材に最も求められる「構想力」の育成に向けた人材育成に取り組むことを検討しています。ご期待ください。（山田）

編集後記

◆瀬戸内海。日本の風景美を代表する地域の一つです。一九三四年（昭和九年）三月に雲仙、霧島とともにわが国初の国立公園として指定されています。

◆「瀬戸内海」の言葉が使われ出したのは歴史的には新しく、西田正憲氏の著書『瀬戸内海の発見』（中公新書）の中のご紹介によれば、「瀬戸内海」の語はThe Inland Seaの翻訳語として明治初年ごろから用いられ始めたと思われ、まず地理学用語として定着し、明治後期には国民の間に確実に浸透したとのことです。欧米のまなざしに触れ激賞された風景美が受容され、新しい概念「瀬戸内海」が誕生。風景がまさに発見されました。

◆「瀬戸内海」は近代ツーリズムの発展に多大な貢献を果たしますが、高度経済成長期にその風土と風景が押しやられました。その反省を踏まえ、「瀬戸内海」の価値が再度見直されています。芸術文化の振興、人々の交流の場としてその輝きを取り戻し始めました。近世日本までは海の道こそ人・物・文化の動脈として大きな役割を果たしてきました。環境の世紀といわれる二一世紀。私たちはいかなる風景を今後創造できるのか、「瀬戸内海」をめぐる動きには大いに啓発されます。

◆日本をこよなく愛し、国際社会との懸け橋となって大活躍をしたF．ブリンクリーの連載が完了。沢木様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。（宇八）

観光文化　第189号

第32巻3号通巻第189号

発行日 2008年5月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒100-0005　☎03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ISSN　0385-5554